
ペルソナW ~ハムはあなたを裏切らない!~

霧紙子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペルソナW ～ハムはあなたを裏切らない！～

【Nコード】

N3983I

【作者名】

霧紙子

【あらすじ】

こちらに見えますのは、新色、ペルソナ3ポータブル&ペルソナ4暴走ファンフィクション作品でございます。今作品はキャラクターのイメージを崩してのギャグ展開をしており、一部のキャラクターを中傷、貶める表現もあり、気分を害され、不愉快と感じられる描写や表現があります。作者をタルタロスに放置しないと約束出来る方だけお進み下さいませよう、お願い致します。

ハム子サーキュレーション（前書き）

2009年10月現在。P3Pの発売が迫ったということで、ペルソナシリーズを盛り上げていくぞーと思って、今回の作品を書きました。3と4を交互にネタにするという形でありますので、よろしくお願いします。なお、作者をテレビ、タルタロスに放置にしないと約束できる方だけ、おすすみ下さい。

ハム子サーキュレーション

原作

『ペルソナ3 ポータブル』

『ペルソナ4』

制作

マヨナカテレビ

タルタロス

小説家になろう

八十稲羽市教育委員会

桐条グループ

脚本、演出、監督

霧紙子（執筆作品『P4 クライマックス番長』、『P4 クライマックス番長 part 2 花村とクローバー』）人がテレビに落ちる瞬間を見てしまった…、夏『、『ペルソナ4』 仮面ライダー電王&自称特別捜査隊（ディケイド完結待ち）『（

テーマ曲

『Soul Phrase』（P3P公式サイトにあるオープニング曲）『

（ペルソナ3 ポータブルのサントラに収録されると思つよ）

提供

ジュネス

時価ネット高田

辰巳ポートアイランド

主演

ハム子（ペルソナ3ポータブル女性主人公）

キタロー（ペルソナ3主人公、ペルソナ3ポータブル男性主人公）

主演、総監督

ペルソナ4主人公

.....

？月？日（？） 雨

夜

今日も雨が降り続けている…。

時間は、午前0時（影時間）

なにもつけていない、テレビを見つめた…。

ザー、ザー！

鮮明な映像で、テレビになにかが映った！

水着姿のりせ だ！

久慈川りせ：ペルソナ4のヒロインであり、アイドルの戦闘ナビゲーター。戦闘中の彼女の応援ボイスで釘宮病を発症したプレイヤー多し。最近、フィギュアを出した。

マヨナカテレビに映る水着姿のりせは片手に『ペ シあずき味』を握っている…！

「これ飲むのも、買うのも…、りせには無理…、キライ…、しんどすぎ…」

『あずき味ペ シ、絶賛発売中！』

……。
映像が途切れた…。
またペ シの宣伝かよ!!
自分はキレイながら、リモコンを投げた。

Take 2

夜

雨が降り続けている……。
時間は、午前0時（影時間）
なにもつけていない、テレビを見つめた…。
ザー、ザー!

鮮明な映像で、テレビになにかが映った!

陽介 が映っている!?

花村陽介：ペルソナ4の準主役。ジュネス。ペルソナは『ジライヤ』。何故か、運のステータスがダントツで低い。そのせいか、フィギュアが出る気配がない。

ジュネスのエプロンをした陽介が片手にペ シあずき味を握っている!

「ペ シやめますか?それとも、人間やめますか?」

陽介は半笑いで言った。

『ペ シあずき味!絶賛発売中!』

「もう在庫処理しきれねえよ!!まだ、しそも残ってたぞ!!」
「よっ、ヨースケ泣くな!クマー!」

陽介が泣いてクマ が現れたところで、映像が途切れた。

クマ：ペルソナ4において、初代ナビゲーターかつ、マスコット兼ヒロイン(?)をこなす謎のキャラクター。『すごいよ！マサルさん』で言えば、めそのポジション。『ピュ〜と吹くジャガー』で言えば、ハミイのポジション。センサーやヨースケを差し置いて、フィギュアを出した。

まだ残ってるのか！と叫びながら、部屋のアルミラックを破壊した…。

Take 3

夜(影時間)

ザー、ザー！

鮮明な映像で、テレビになにかが映った！

今度は、千枝 1と直斗 2。

完二 3が口からペ シあずきが混じった泡を吐きながら、地面に白目で気絶している。

1 里中千枝：ペルソナ4のメインヒロイン。『肉はあなたを裏切らない』、『盛るぜー！超、盛るぜー！』という名言を世に残した(一部、違うキャラクターの台詞がありますが気にしないで下さい)。早くフィギュアを出して欲しいキャラランキング、堂々の1位(作者調べ)。

2 白鐘直斗：ペルソナ4メンバーの頭脳派少年探偵。バラすけど、実はおんにゃのこだったとの離れ業を為した。早くフィギュアを出して欲しいキャラランキング、堂々の2位(作者調べ)

3 巽完二：ペルソナ4メンバー中、最も早くSPが尽きるオトメ。早くフィギュアを出して欲しいキャラランキング、残念ながら最下位(作者調べ)

「無理です！花村先輩が大量の在庫抱えてるとはいえ、こんな物を宣言することなんて、僕には出来ません！それに、さっき飲んだ異君は白目向いてるじゃないですか！！」

「直斗君！気持ちはわかるけど、我慢して！飲んだフリだけでいいから！！」

千枝は車の塗装屋さんがするようなマスクとゴム手袋装備で、ペプシあずきのふたを開けた…。

「なにこれ！？ふた開けた時点で臭いがヤバイじゃないですか！！いやああ！！なにこれ、嫌がらせなの！？いやああ！！」

「直斗くん、キャラ変わってる！！」

『ペ シあずき味！絶賛発売中！！』

千枝が必死に直斗に宣言させようと努力してる部分で映像が途切れた…。

……………。
うがぁ！！と意味もなく、自分は自室のソファーを破壊した。

Final

夜（影時間）

雨が降り続けている……………。

なにもつけていない、テレビを見つめた…。

ザー、ザー！

確か、まだ雪子 だけ宣言していない…。

天城雪子：ペルソナ4のヒロインであるが、ペルソナ4メンバー中、最も予測不能の行動と発言をする。ドラマCDで陽介がiiiこ

と言ったのに、すぐに急速冷凍させたのは伝説である。一番最初にフィギュアを出した。もはや、入手不可能状態なんで持ってたら誰か譲ってください（作者談）

鮮明な映像で、やはり、雪子がマヨナカテレビに映った。着物姿だ…。

「えっと…、天城屋旅館次期女将…、天城雪子です…。2009年11月1日に発売予定のプレイステーションポータブルソフト、『ペルソナ3ポータブル（P3P）』の女性主人公編にてゲストキャラで参加させていただきました！中学時代のわたしが登場しますので、みなさん、買ってね！！」

雪子はP3Pのパッケージを片手に営業スマイルで言った。

『新色ペルソナ…、ペルソナ3ポータブル、2009年11月1日発売！！』

……。

自分 は呆然とした。

自分（ペルソナ4主人公）：その名の通り、ペルソナ4主人公。

本名不明。堂々とした振る舞いと存在感、紳士的で硬派な風貌から番長とあだ名され親しまれる。自称特別捜査隊メンバーのリーダー。本ファンフィクションにおいて、一番跡形なく暴走しているが、最

近ツツコミが板について来た。口癖は、落ち着け、そっとしておう、！?など。

すると、誰かがテレビを見ている自分の肩を叩いた。
振り向くと……………。

「買ったんだ……………」

「買いなさい……………」

キタロー 1とハム子 2がP3Pのパッケージを片手にして部屋に居た……………。

1：キタロー（ペルソナ3主人公、ペルソナ3ポータブル男性主人公）：その名の通り、ペルソナ3主人公。本名不明。前髪で片目隠れてて、イゴールの声が目玉の親父だったため、キタローとあだ名される。ゲーム本編では、ヘビーな設定を背負ったが故にヘビーな結末を迎え、私生活では順平やゆかりなどから八つ当たりされ、ふとしたことで友人関係がギクシャクしたりするため、某提示板にて『一番なりたくないRPGの主人公を挙げるスレ』でよく名前が挙がる。どうでもいい…が口癖だけに、女性関係がとんでもないことになっている。

2：ハム子（ペルソナ3ポータブル女性主人公）：その名の通り、ハム子。由来は、ゲームのプロモーション画面での名前が『主人公』だったため、それが『公子』から『ハム子』に転じた。まだ現実世界でゲームが発売されておらず、ハム子のキャラがわからないので、このファンフィクション作品では作者の独断と想像で書かせてもらう。

……………。

自分はキタロー、ハム子に数時間ぐらい睨まれた……………。

ファンフィクション作品

『ペルソナW（3&4）クライマックス番長 part 2・5（外伝）』
「ハムはあなたを裏切らない！」

この作品は、PS2ソフト『ペルソナ3ポータブル』、『ペルソナ4』を題材にしたファンフィクション作品であり、実際のゲームや公式サイドとは、まったく関係ありません。確かに関係ないけどとりあえず、2もリメイクしてくださいよ！と願っている非公式ファンフィクション作品です。

START

自分は、ドン！！と壁を殴った。

！！

！？

キタローと、ハム子はビックリしている。

自分は拳を握りながら、こっ叫んだ。

こっちはドラマCD第2弾が2009年10月発売なのが、2009年12月に延期したんだぞ！！

なのに、あんたらは延期する雰囲気もなさそうだし恵まれてんだよ！！サントラだって出るんだろ！！誤魔化したって無駄だ！！Amzonに表記されてるんだぞ！！

どうして、こっちはドラマCDが2回連続で延期するんだよ！！更に言えば、第2弾のあと、また4でドラマCDが出るかどうか微妙なんだぞ、こっちは！！

……。
と言って、自分は頭を抱えて床に泣き崩れた。

「
」

キタローとハム子は、泣き崩れる自分の肩に優しく手を置いてくれた……。

二人は夜（影時間）が明けるまで、泣き続ける自分を慰めてくれた……。

キタロー、ハム子との仲が深まった気がする……。

影 お兄さん 前編

「ジン……。話があります……………」

タカヤ は廃墟の影で、パソコンをいじっているジンに話し掛けた。

タカヤ：ペルソナ3のライバルキャラ。ストレガのリーダー的存在で、何故か、いつも上半身裸。寒くないのか？よくわけのわからない電波発言をする。『聖 お兄さん』のイエス様に似てるが、違う人。

「なんや、タカヤ…？相変わらず、イエッサに似とるな」

ジンはパソコンを閉じた。

ジン：ストレガの一員。ネットを駆使した行動を起こすネット弁慶。いつも、手榴弾を持ち歩いてて、普通に危ない人。余談だが、決戦の時、彼を普通に助けてあげても良かったんじゃないかな……………。

「黙りなさい……。毎月のネット回線の支払いを誰が払っていると思っっているのです…？」

「で、なんの用や……………」

「存じてる思いますが、滅びの塔ことタルタロスと、午前零時きっかりに起きる影の時間を破壊しようと企んでて、我々の邪魔ばかりして、我々のアナライザー担当のチドリを攫ったり、新垣真次郎を元の鞘に戻したりして、なんか複数のペルソナ使いたりするチートのキタロー野郎をリーダーにした愚かなペルソナ使いの連中のことを知ってますよね……………」

「なんで、存じてると聞きながら、必要以上に説明口調？」

「彼らに動きがありました……………」

！？

ジンは立ち上がった。

「なんやと！？あいつら、今度は、なにをやらかすつもりや…！」

「奴らは、仲間を集めるつもりですよ」

「仲間やと！？ちっ！ただでさえ、わけわからんのばかり増えとるんやぞ！（ロボットとか、犬とか！）」

「ええ……………、だからこそ、これを妨害せねばなりません……………。滅びの塔、影の時間を破壊しようなどと…、許されることではありませんからね……………」

タカヤとジンの顔の影が濃くなった。

「しかし、奴ら、どないして仲間増やすつもりや……………。そう簡単に影時間に適応する人間なんか見つかるんか？」

「これを見なさい……………」

タカヤはジンに一枚のチラシを渡した。

チラシにはこう書かれていた。

『影時間に適応出来る方、大募集！！年齢、性別、学生問わず、犬か熊でもOK！自分で自分の頭に銃を突き付けられる方なら、誰でも大歓迎！！一緒にペルソナ使いになろう！ 桐条グループ』

…………。

ジンはダンスに足の小指ぶつけたような顔をした。

「……………」

「そんなことより、ジン……………。今日の夕食、うどんでもいいですか？」

タカヤは鍋とガスボンベを取り出した。

翌日の夜

ジンは変装して、ペルソナ使い面接会場に向かった。面接会場は普通に、学生寮で行われた。

フロアーには結構、人が並んでいた。

(うわっ、意外といっぱいおる！？意味わかってて、きとんのか?)

ジンは列に並んだ。

「はいはいー、面接は順番になりますー。はい、そこ、押さないでー」

ハム子が列の整理に務めている。

(とりあえず、なんとかしてでも、面接に合格して、奴らの企みを阻止するんや!)

ジンは面接に合格し、キタロー達の妨害をしようと燃えた。そして、面接の順番はジンに回ってきた。

ジンは面接室に入った。

部屋の中には、キタローが一人机に座っていた。彼が面接官のようだ。

「はい、次の方、どうぞー」

「はい！失礼します（よし、バレとらんな）」

ジンはキタローの前に座った。変装はバレてない。

だが…………。

キタローは手を差し出し…。

「はい、まず履歴書の提出…」

「えっ!?!」

ジンは驚いた。

まさか、履歴書が必要だったとは思ってなかったらしく、準備していなかったのだ…。

「どうしました？後ろがつかえてるんで、早く提出なさい」

キタローは提出を催促した。

ジンは、持ってきたとるわけがないがな！と心の中で叫んだ。

「すつ、すみません…。履歴書を…」

「なにぃー？持ってきてないー!?!」

キタローは怒った。

「あのねー、君ー？こっちは貴重な時間を潰して、面接をやっ
てあげているんだよー、なのに、履歴書がないなんて、本当に許されな
いことだよ、君ー？履歴書は、会社が君をどんな人間かを見極める
上での重要な情報なんだよー。君がどんな人間かわからないで、雇
えつてのは出来るわけないだろ、君ー？履歴書忘れてきました……
……って、社会で通用すると思ってるの？ええ？うちだから、こんな
こと言っただけで、他の会社じゃ、こんなこと絶対に言わな
いで、すぐに門前払いだからねー、本当にー。肝に刻んで、金輪際、
こんなことないようにしてよー」

「ホンマ……、すみません……（なんで、こいつ学生なのに、こんな偉
そうなんや……。ていうか、実際言われたことあるんか？）」
「まあ、いいでしょう……。今回は大目に見ましよう……」
（ええんかよ！？ていうか、大目に見すぎやろう！？）

どうやら、履歴書がないのは許されらしい。

「はい、時間ないから、次！一時間後に食堂で学科試験やるから……、
しつかり頑張りたまえよ……」

（学科もあるんか……。意外にシビアに、人選してんやな……）

ジンは面接室から出て、ハム子に案内され食堂に向かった。
食堂には、面接をクリアした数名が筆記用具を構えている。
席に座り、ふうーとジンは息を吐いた。

（ご都合主義のおかげで、面接はクリア出来たが……。……。問題は学
科試験や……。あかん……。普段、ちゃんねるに入り浸ってる自分に
一般教養の試験はあかんて……）

ジンは頭を抱えた。

すると、試験官の手伝いをしているエリザベスが机に座る人達一人一人の机にクイズ番組などで使われるフリップボードを何枚か置いていた。

エリザベス：ベルベットルームの住人で、イゴールのお手伝いさん。4のマーガレットは姉。なお、キタロー達と闘うイベントがあるが、しかし、メギドランの威力がレベル99のキャラでも即死する威力のため、ラストバトル以上にプレイヤー達を絶望させた。

ジンの机にも、フリップボードは置かれた。

「ん？これ、なにに使うんや？」

ジンはフリップボードを握った。

学科試験なんだから、ペーパーテストやるんやないのか？と思っていたが…、何故、フリップボード？

「すみません」

「はい？」

ジンは隣の席の人に聞いた。

「学科試験って、ペーパーテストやないんすか？」

「いや、クイズ形式だよ」

「なんやて！」

ジンは驚いた。

なぜ、面接の学科試験でクイズをやるんだ…と思いつつ、ジンは隣の人に礼を言った。

ちなみに、このさりげなく登場した隣の人…。実は、現在発売中、久しぶりのアトラス強力マガ『真・女神転生ストレンジジャーニー』の主人公『タダノヒトシ』である。

何故、ペルソナと世界が違う女神転生のキャラが登場したのか？
答えは、特に意味はない……………。
それだけだ……………。

一時間後…

キタローがマイクを持って現れた。

「クイズ！ペルソナ頭脳パワー！！」

テレットテター、テレットテター！

どこからか、タイトルバックが出てきた。

パチパチ…と、エリザベスが拍手している……………。

ジンは、この元ネタ…今の小中学生、高校生に解るかな…と心配した。

「はい、面接お疲れ様でしたー。これからの学科試験は、クイズ形式で行います。最も多く正解した方が、採用となります……………」

と、キタローはハム子から渡されたカンペを読んだ。

ジンは、そんな軽いノリでええんか？と思った。

「今から、ホワイトボードに1問ずつ問題を書いていきますので、制限時間10分以内に、先ほど、エリザベスが配ったフリップボードに答えを答えてください。制限時間を過ぎた時点で、わたしがホワイトボードに答えを書いていきますー。ちなみに、わたし（CV・石 彰）がエリザベスと言うと、銀魂の桂と被るとか思った奴は、直ちに退室しなさい」

（ファンフィクションとは、それ言うたらあかん！）

ガチャッ…。

ジンの隣に座っていたタダノヒトシさんが立ち上がった。

(…?)

ポン！とタダノさんは、ジンの肩に手を置いた。

タダノさんは、ジンに笑顔で親指を立てた。

そして、素直に退室した。

……。

「タダノさああああん!!! (思ったんか!?)」

ジンは泣き叫んだ。

さすが女神転生のキャラなだけあり、即ゲームオーバーだ。

「いいですか？みなさん、さっきの人みたいに、わたしの機嫌を損ねると採用しませんからね」

キタローはそう言いながら、ホワイトボードに問題を書き始めた。

(…、こいつ…、最悪や…)

果たして、ジンは見事、合格出来るのか!?

次回へ続く。

ハーftime

『りせちーのパーフェクトさんすう教室』

歌：久慈川りせ feat. クマクマ

「みんなー、りせちーのさんすう教室始まるクマよー！りせちーみたいいに、いつそのこと通訳つけてやるくらいの気持ちで頑張るクマねー」

「ジュネスからバスが出てー、初めに先輩乗りましたー

四目内書房で先輩降りて、イザナギ、ジライヤ乗りましたー

あたしんちで、イザナギ降りて、結局、結局、結局、合計何人だ！？

答えは、答えは、答えは、0人！！0人！！

何故なら、何故なら、それは！？」

りせが、普通に歌を歌っていると…。

ガタン！と戸を開いて自分が現れた。

りせは振り向いた。

「いまさら、なによー！！」

りせが自分に向かって叫んだ。

りせ…、愛してる…！と自分は言った。

「バカア！」

りせは泣きながら、自分に抱きついた。

すると、後ろから雪子が現れた…。

「この泥棒猫…」

「雪子先輩…!!」

完!!

影 お兄さん 前編（後書き）

タカヤと、イエッサ……。似てるよね？

影 お兄さん 後編（前書き）

元ネタ「銀魂の攘夷の面接回」

影 お兄さん 後編

前回までのあらすじい〜！

キタロー達ことおー、ニユクス討伐隊があー、怪すいいいー、仲間募集のオーディションをしているとのことであっ！ああっ、潜入したあー、ストレガの〜、ジンンツッ！！

果たしてええええ〜、彼は〜、無事で、い、ら、れ、る、のか〜！ぶるあああ！！！！

……………

「はい、それでは第1問、漢字の読み取り問題……………。制限時間は、10分。答えはお手元のフリップ……………。じゃなかった、フリップボードに書きなさい……………。制限時間過ぎた時点で、正解をホワイトボードに書きます……………」

と云って、キタローはホワイトボードに問題を書き始めた。

ジンはフリップ…………？という言葉にしながら、ホワイトボードを凝視した。

キタローはホワイトボードに『真田明彦』と書いた。

！？

「はい、これをなんと読むか？はい、はじめっ！」

キタローは時計を見てから、手を叩いてスタートさせた。

受験者達が一斉にフリップボードに解答を書き始めた。

(なんや…………、学科試験、クイズ形式とか言われ、正直、焦ったが…………

…………、全然、大したことあらへん……………。この問題の答えは……………)

ジンはフリップボードに『さなだ あきひこ』と書いた。

(なんや、これ簡単やん！しかも、真田明彦っての奴らの仲間の名前や、間違える要素なんあらへんわ！)

ジンは笑った。

そして、10分が経過した。

「はい、時間切れです」

キタローはホワイトボードに解答を書いた。

「はい、正解は……………」

『答え、プロテイン先輩』

「正解は、プロテイン先輩だ」

サイクロン！！と音を立てて、ジンは机に頭をぶつけた。

ジンの解答は外れた。

(あだ名かよ！)

「ちなみに、肉彦先輩でも正解としよう」

(なんで、漢字の読み取りを漢字で答える！？)

ジンは手元のフィリップボードを、ぐちゃぐちゃにした。

(わかるか！んな問題！？ヒツカケやん！？誰も答えられんわ！)

ジンはぐちゃぐちゃにしたフィリップボードを床に投げ、ふと前の席の人の解答を盗み見みした。

「なんだよー、ヒツカケかよー」

前の席の人はフィリップボードに『まだ あけひこ』と書いていた。ジヨーカー！！と音を立てて、ジンは机に頭をぶつけた。

(普通に間違えるなあああああ！！)

ちなみに、前の人は普通の人で、ゲストキャラではない。

キタローはホワイトボードを消し、また新たに問題を書き始めた。

「はい、第2問！これも、読み取り問題だ……………」

と言って、キタローはホワイトボードに『伊織順平』と書いた。

「はい、これをなんと読むか？はい、はじめっ！」

キタローは時計を見てから、手を叩いてスタートさせた。

受験者達が一斉にフリップボードに解答を書き始めた。

(普通に考えれば、『いおり じゅんぺい』や……。しかし、さっきの問題での解答がアレじゃあ、わかるかいな……………)

ジンは頭を悩ませた。
すると……。

(さっきの問題の解答は、あだ名やったぞ……………。なら、こいつも……………)

閃いたジンは、フリップボードに『テレット』と書いた。

(ははん、知つとるぜ……。こいつはレベルアップすると、テレットテーとか抜かすから、テレットとあだ名されとるのを……………。今回ばかりは、正解やな……………)

ジンは自信満々で笑った。

そして、10分が経過。

「はい、時間切れですー」

キタローはホワイトボードに解答を書いた。

「はい、正解は……………」

『答え、まるで、ダメな、俺にばっか八つ当たりするヒゲ男、略して、マ・ダ・オ』

「正解は、マダオだ」

ルナ！トリガー！！と音を立てて、ジンは机に頭をぶつけた。
ジンの解答は外れた。

（わかるがあああああああ！！！！）

「ちなみに、サービスで、俺に八つ当たりしても謝んねえよな、八つ当たりされて俺だって傷ついてんだよ、なにも、13番目のシャドウが俺のなかに居たとはいえ、あんなこと言っなよ…でも正解としよう」

（全部、お前の愚痴やんけ！？）

キタローはホワイトボードの文字を消した。

「第3問！なんかダレてきたし、ネタもないし、実は言うと、本当は前編後編に分けるつもりじゃなかったけど、制作側がこのクイズの下りをパソコンのアクセシビリティで2回ぐらい消失して、もう3回ぐらい、この話を書き直してるから、早く終われとのこと、これがラスト問題だ。これがわかったら、もう無条件で合格にする！」
（ファンフィクションとはいえ、そんな制作側の事情いわんでもええわ！）

皆さんも執筆の際、こまめな保存や、メモにコピーしてバックアップしておくなどして、不慮のデータ喪失に気を付けてください。

キタローはホワイトボードに『音痴』と書いた。

「はい、これをなんと読むか？はい、はじめっ！」

キタローは時計を見てから、手を叩いてスタートさせた。受験者達が一斉にフリップボードに解答を書き始めた。

(ヤバイ！さっきのアレで、なおさら、答えが解らんわ！！普通に考えたら、『おんち』やる！？しかし、奴のことや、絶対ろくな答えやあらへん！！もしかして、答えはジャイアンか？いや、さっきからの問題はペルソナ関係やから……………)

ジンは疑心暗鬼で頭を悩ませた。同じく、他の受験者達も頭を悩ませ、まったくフリップボードになにも書けないでいた。

時間は容赦なく過ぎて行く。
時は待たない……………。

「はい、あと1分……」

キタローは時計を見ながら言った。

(うわああああー！！畜生！もう適当でええわ！！)

ジンはフリップボードに『初代ペルソナ主人公』と書いた。
そして……………。

「はい、時間切れです」

他の受験者は、わからなかったー！うわああああー！！などと呼び声を上げる。

ジンは、もう無理や…と諦めた。

キタローはホワイトボードに解答を書いた。

「はい、正解は……、『初代ペルソナ主人公』です……」

「へっ………？」

ジンは呆然とした。

「正解者は君だけか……」

キタローはジンに近づいた。

「えっ？正解なん？」

ジンはキョロキョロした。

「おめでとじいぞいます……」

「おめでとじー」

「おめでとじー」

エリザベス、ハム子、キタローが拍手をして、正解したジンを讃えた。

すると、他の受験者達もパチパチ！パチパチ！と、ジンに盛大な拍手をした。

(えっ…？マジで、合格…？ウソ…)

ジンは合格したという実感がなかったが、とりあえずは安心することにした。

(はぁー、焦ったが……。なんとか、奴らの……)

「合格した君には、最終試験として『特別スペシャルゲスト』と戦ってもらいます……。彼に勝てれば、見事、採用となります」

(はっ?)

キタローは、さりげなくなにかを言った。

「えっ、特別スペシャルゲストと戦う?」

「はい、特別スペシャルゲストさんー！それでは、お願いしますー」

と、キタローは手を叩いた。

すると……。

ドッギヤーンー！

!?!?

なんと、いきなり学生寮の壁が爆発した。

「うわぁああー!!!なんや!なんや!?!」

ジンは驚いた。

そして、爆破された壁の向こうに居たのは……………。
ゴゴゴゴゴゴ……………。

「どうも……………、最終試験で戦う特別スペシャルゲストの初代ペルソナ主人公です……………」

なんと、初代ペルソナ主人公 がそこに居た。

初代ペルソナ主人公：ロード時間長すぎ、セーブ箇所すくねえし、ダンジョン行き帰りに一時間は掛かる鬼畜難易度で有名なアトラスマゾゲーの最高峰、初代ペルソナの主人公。PSPでリメイクされても、鬼畜難易度が変わらなかった……………。

「うそおおおん!？」

ジンは鼻水を吹いた。

「わざわざ、ご足労でした……………」

「わざわざ、お越しいただいてありがとうございます」

キタローとハム子が、初代ペルソナ主人公と握手を交わした。
ジンは腰を抜かした。

「いくら、ファンフィクションとはいえやりすぎやろ!？初代出すのわ!」

すると、初代ペルソナ主人公はジンの方に足を向けた。

「おめえか？俺と戦うのは？確か、俺のこと、音痴だったよな?」

「へっ?」

初代ペルソナ主人公は、なぜか、すごく怒っている。

初代ペルソナを知らない人に解説しよう！

初代ペルソナは敵である悪魔と交渉、契約してペルソナを創る。その際に交わされる交渉にて、主人公の『歌う』というコマンドがまったく役に立たなかったため、初代ペルソナ主人公はファンの間では音痴と言われている！

「誰が、音痴だ……。俺だって、気にしてんだよ……………」

「言うとりません！！あれはクイズの答えで！ていうか！ツッコミどころ満載で、どっからツッコめば……………」

ジンが喋ってる途中に、初代ペルソナ主人公はカードを握り、ペルソナ『セイメンコンゴウ』を呼び出した。

「ぎゃあああああー！！！」

ジンは初代ペルソナ主人公にボコボコにされて、不合格となった

……………。

ストレガのアジト。

ジンはタカヤの元に帰ってきた。

「おかえり、ジン。ずいぶん、ボロボロだね。今日は、お好み焼きでいいかな？」

タカヤは鉄板を用意して、お好み焼きの生地を練っていた。
ジンはボロボロの身体で、うん…と頷いた。

影 お兄さん 後編（後書き）

注意：『伊織順平』に対する愚痴の内容は、あくまで、キタローというキャラが勝手に言っているという形であり、作者である霧紙子の本音とかではありません。

公物語（前書き）

元ネタ「ギャグマンガ日和 アンラッキーフレンズ」

公物語

午前0時、影時間……………。

月光館学園、タルタロス。

エントランスには、キタロー、ハム子、順平、ゆかり、真田、美鶴、風花、アイギス、乾、コロマル、

荒垣の特別課外活動部が集まっていた。

風花 はエントランスで、アナライズのスタンバイをしている。

山岸風花：ペルソナ3のアナライザー担当。彼女の『オラクル』不発で、ゲームオーバーになったプレイヤーも多いはず。彼女の作る料理は凶器。ペルソナの男子キャラは家庭的なの多くて、女子キャラのほとんどが料理が作れないとは、どういうことだ。

「それじゃあ、みなさん、気をつけて行って下さいね」

「わかった…」

「任せといて」

そして、キタロー、ハム子を中心に、皆タルタロスの階段前に立った。

「へっ、俺様に任しとけ!!」

順平が調子に乗って、階段に足を乗せた。

「あんま、調子乗らないでよー」

ゆかりが呆れながら言う。

すると、順平は笑いながら階段を駆け上がる。

「ったははは！！ダイジョーブだって、ゆかりっ……………！！うわあ
あああああ！……………」

！！

なんと、順平がタルタロスの階段で足を滑らせた。

一気に階段から滑り落ち、ドスン！と順平はエントランスの床
に背中から激突した。

……………。

「どっちら……………、ここまでみてえだな……………」

この言葉を最期に、順平は動かなくなった。

「順平えエエエ……………」

真田は泣き叫んだ。

「バカヤロウ！！あれほど、調子に乗るなって！！」

真田は床を殴って叫んだ。

「いっつも帽子で、変なタイミングでラクカジヤ連発して、レベル
アップするたびテレッテ〜と歌い、最近、学校で誰かから靴や帽子
にガムとか付けられて悩んでいた順平君がこんなところで！！」

ハム子は泣いた。

「いや、ありゃ自業自得だろ……………」

荒垣は意外と冷静に対処した。

「今のところ、戦力には、全然問題ありません」

「なら、先に進むぞ」

「はい」

アイギス、美鶴、ゆかりも怖いくらいに冷静だった。

「凄い！みんな、凄い早さで立ち直ったぞ！」

「ワンワン！！」

乾とコロマルは驚きの声を上げた。

一方、キタローは……………。

(ぬぬつ、プツ、グツ……………、ダメだ…、まだ笑うな……………、こらえるんだ……………、寮に着いたら大爆笑してやる……………)

『耐えて！耐えて！根気は大事』

アニメとらドラ！の主題歌『プレパレート』をヘッドホンで聴きながら、必死に笑いを堪えていた。

すると、今度は荒垣が階段に登り始めた。

「つたく、階段ぐれえで、時間とら…うわあああああああ！！
！……………！！」

！！

つるん！！と、荒垣は階段に乗せた足を滑らせた。

一気に階段から滑り落ち、ドスン！！と荒垣はエントランスの床に背中から激突した。

……………。

「みんな…………、シフォンケーキ作っておいたから、あとで食べるよ…………」

ガクッ!!

この言葉を最期に、荒垣は動かなくなった。

「シンジ……………!!!!……………!!!!」

力尽きた荒垣に、真田が叫んだ。

「シンジ!!バカヤロウ!!俺より先に逝っちまいがって!!バカヤロウ!!!!」

真田は泣きながら床を殴った。

「いっつも帽子で、いっつも長袖のコートで暑苦しくて、更に見た目の怖さに反して、動物好きで料理洗濯掃除などの家事作業が得意で、ペルソナは弱点ないけど目立ったところもない荒垣先輩が!!!!」
「ワンワン!!」

ハム子、コロマルは泣き叫んだ。

「今のところ、少し戦力に問題がある以外、探索続行可能です」

「なら、先に進むぞ」

「うん。シフォンケーキ、楽しみ」

アイギス、美鶴、ゆかりもやっぱり怖いくらいに冷静だった。

「……………」

乾はだんまりした。理由は、ゲーム本編参照。

一方、キタローは…………。

『Please dont say You are lazy』

だつて本当はcrazy』

(澪たん、萌えツツ)

アニメけいおんの主題歌『Don't Say Lazy』を聴いていた。

すると、今度は美鶴が階段に登り始めた。

「まったく、そろそろ、影時間があけてしま…っ」

パキッ！！

美鶴は階段を登っていた途中、急に上るのをやめた。

そして、エントランスに戻り、無言で入り口まで向かって行った。

…………。

どうやら、美鶴は帰ろうとしている…………。

「桐条先輩…、どうしたんですか……………?」

……………」

ゆかりは帰ろうとする美鶴に近づいた。

美鶴は扉を開けた。

「ブーツの踵が折れた……………」

美鶴は帰った。

「美鶴うううううううううううう……………」

真田が叫んだ。

「美鶴！！バカヤロウ！！俺より先に帰っちまいやがって！！バカヤロウ！！！」

真田は泣きながら床を殴った。

「たこ焼きをたこをそのまま焼いた物だと無理のある勘違いをして、正月の振袖姿が極道の妻みただった桐条先輩が！！！」
「ワンワン！！！」

ハム子、コロマルは泣き叫んだ。

「かなり戦力に問題がありますが、まだ探索続行可能です」

アイギスは怖いくらいに冷静だった。

「……………」

乾は振袖は『穿いてない』ってことを思い出して、変な気持ちになっただけだ。

一方、キタローは……………。

『でも、そんなんじゃないダメー もう、そんなんじゃないら、心は進化するよ、もっともおくと』

(撫子、蕩れッッ)

アニメ化物語の主題歌『恋愛サーキュレーション』を聴いていた。すると、今度はゆかりが階段に登り始めた。

「もう時間ないわよ!!はやくいっ……………」

!!

ゆかりは階段に上ろうとした瞬間、急に上るのをやめた。

そして、エントランスに戻り、無言で入り口まで向かって行った。

……………」。

どうやら、ゆかりは帰ろうとしている……………。

「ゆかりちゃん…、どうしたの……………」?

「……………」

風花は帰ろうとするゆかりに近づいた。

ゆかりは扉を開けた。

「召喚器、忘れてきた……………」

ゆかりは帰った。

「岳羽あああああ—————!!!!!!!」

真田が叫んだ。

「岳羽!!バカヤロウ!!ちゃんと、持ち物確認してから来い!!」

真田は泣きながら床を殴った。

「いつの間にか、ヒロインの座をアイギスとあたしに取られたゆかりちゃんが……!」

ハム子は泣き叫んだ。
いつの間にか、コロマルは帰っていた。

「ヒロイン的な意味で、まだ探索続行は可能です」

やはり、アイギスは怖いくらいに冷静だった。

「……………」

乾は振袖は『穿いてない』ってことを思い出して、まだ変な気持ちになっている。

アイギスが、ハム子の前に出た。

「そういえば、キタローさんがさつきから静かです」

「あつ、そういえば。てか、居ないし」

アイギスに言われハム子は周囲を見渡したが、キタローは居なくなっていた。

すると、一枚のメモ用紙が床に落ちている。

ハム子は、それを拾い上げた。

『レンタルしてきたけいおんのDVDの返却日が、今日だったんで
帰ります。byキタロー』

……………。

「キタローおおおおお——————!!!!!!!!!!!!!!」

真田が叫んだ。

「バカヤロウ！ー！ちゃんと、返却日を確認してから来い！！」

真田は泣きながら床を殴った。

「これ以上は探索不能だと思います」

急にアイギスは探索中止を言い出した。

乾は振袖は『穿いてない』ってことを思い出して、変な気持ちになつてしまい、とても探索できる気持ちじゃなかったので帰った。

風花が、ハム子の前に出た。

「ハム子ちゃん…?」

「なに、風花ちゃん?」

風花はモジモジした。

「ごめんなさい…、今日、実は観たいアニメがあったの………」

「えっ……」

……。

風花は帰った。

「山岸イイイイー……！！……！！」

真田が叫んだ。

「バカヤロウ！ー！お前の部屋にDVDプレイヤーはないのか!?!」

真田は泣きながら床を殴った。

「本当の意味で、探索不能だと思いますので帰るであります」
「でっ……」

アイギスも帰った。

……。

タルタロスに、真田とハム子だけが残った。

(ちよっ、どーすんの…、これ)

ハム子は焦った。

すると、真田がハム子の肩に手を置いた。

!?!?

ハム子はドキッとした。

「仕方ない…、今日は引き上げて、俺達も帰るぞ…」
「あっ、は、はい…」

ハム子の顔が赤くなった。

「どっかコンビ二に寄るか?」
「あっ、はい!よ、喜んで!」
「どうした、顔が赤いぞ?」
「なっ、なんでもないです!」
「おかしな奴だな…」

こうして、ハム子と真田もタルタロスから帰還することにした。
今日の探索は中止になったが、ハム子にとっては思い出に残る一日だった。

しかし、みんな忘れていた。

階段から落ちて、気を失っている順平と荒垣がエントランスにそ

のまま放置されているのを…。

.....

ハーフタイム

『影 お兄さん2』

「ただいまー。ふふんー」

エコバックをぶら下げたタカヤが嬉しそうに、コンビニから帰ってきた。

「どないした？やけにウキウキやな」

ジンにエコバックを渡しながら、タカヤは嬉しそうに…。

「いやー、さつきコンビニに行ったら、女子高生達に『あの人、ジヨニーデップに似てない？』とか言われてしまいましたよー」
「へえ、そら良かったわな」

ジンはエコバックから、タカヤが買ってきたペシを取り出して飲んだ。

タカヤはまだ嬉しそうだ。

「いやー、世の中、まだまだ捨てたものではありませんね…、ん？ジン？どうしましたか？」

タカヤは、ペシを口に含んだまま動かなくなったジンを心配し

た。

……。

なんと、ジンはペ シを飲みながら気絶している……。

「えっ！ちょっと！ジン、どうしましたか！……うわっ、白目向いてる！……！……ていうか、なにこのペ シ、くさっ……！」

タカヤが買ってきたのは、普通のペ シではなく……、ペ シ
あずきだ……。

公物語（後書き）

思った以上に、ストレガの二人を気に入っている自分が居る……。。

真田先輩の財布がマジックテープ式だった…（前書き）

元ネタ「彼の財布がマジックテープ式だった……」

真田先輩の財布がマジックテープ式だった…

2009年某月某日（日）

日曜の休日の昼下がり…。

ハム子と真田 が、シャガールでコーヒーを飲んでた。

真田明彦：P3のメインキャラクター。イライラしやすく、情緒不安定、ドライで殺伐としたメンバーが多い中、セーブ箇所がない場所では自らセーブ箇所になってくれるという漢気溢れる先輩キャラ。ボクシング部で、プロテインが大好き。いつも食事中にプロテインを飲むことから、プロテイン先輩とあだ名される。新垣先輩がイベントでは、誰が主人公だかわからなくなっただくらいに劇的な成長を見せた。

ハム子はふと腕時計を見た。

もうすぐ、夕方だ。

「あつ、そろそろ帰らないと…」
「そうだな」

二人は席から立ち上がった。

ハム子は会計をしようと、伝票を持った。
すると…………。

「俺が払う」

「えっ！」

真田はハム子から伝票を取った。

ハム子は慌てた。

「そんなー！申し訳ないですよー！せめて、自分の分くらいは……」
「気にするな。先輩である俺の顔を立てさせると思って、奢らせてくれ」

（真田先輩……）

と言って、真田は笑いながら伝票を持って会計に向かった。

ハム子の顔は赤くなっていた。

二人が会計に立つと、店員が現れた。

「ありがとうございます……って、真田さんにハム子じゃないか……」

「キタロー!？」

!?

会計には、ここでアルバイトしているキタローが出てきた。

真田とハム子は驚いた。

「あんだ……ここでバイトしてたんだ……」

「ポーダブルでは、アルバイトが出来るようになったんだ……」

と言いながら、キタローは伝票を受け取った。

「はいはい……、フェロモンコーヒー2杯で、八百円ね……」

キタローは真田とハム子と一緒に居ることを、まったく気にせず真面目にレジを打っている。

……。

すると、ハム子は真田に聞こえないように、キタローの耳元に近づいた。

「…………… あんた、あたしが真田先輩と一緒にのを見て、冷やかしたりしないの？ あー、なに？ お前らー、二人ー、もしかして…って、順平君みたいな感じに……………」

「どうでもいい…（あいつと一緒にするな…）」

キタローはバツサリ切った。

ああ……………、そうそう……………、こいつはこついう奴なのよね……………と、ハム子は思った。

「そんなことより、あんた……………。日替わりで、いろんな女の子と遊んでるの見たけど……………」

「しょうがないだろ……………。3のコミュニケーションだと、こつちがそんなつもりなくても、向こうが勝手に特別な関係に進ませるんだから……………」

「ゆかりちゃんといい、風花ちゃんといい、美鶴先輩といい、会計役の千尋ちゃんといい……………、あんた、何股かけてんのよ!？」

「どうでもいい……………」

「どうでも良くない!！」

キタローとハム子が口喧嘩を始めた。

すると、真田が……………。

「なにを話してるかわからんが……………。とりあえず、支払いを済ませよう」

と言って、真田は財布を取り出した。

バリっ！ベリッ！…と、真田は財布を開けた……………。

彼の財布は、マジックテープ式だった。

真田の財布のベリベリ!…という音が店内に響く。

「……………プツ」

真田の財布を見て、キタローは笑いを堪えている。

「わっ、わ、笑うなあー！ー！真田先輩が、マジックテープ式で何が悪いの！？」

顔を赤くして、ハム子はキタローの襟首を掴んだ。

「ん、どうした？」

よくわからない真田はマジックテープ式の財布を、バリバリ！と鳴らしている。

さらに、ハム子の顔が赤くなった。

「やめて！！真田先輩！それ以上、マジックテープをバリバリやらないで！！」

「なんでだ？この音、好きなんだよ」

「やめつてええええー！ー！ー！！！！！！」

マジックテープ式の財布をバリバリ！と鳴らす真田に、ハム子は泣き叫んだ。

キタローは前かがみになって、必死に笑いをこらえた。

他のお客達が白けた目で、この会計の3人を見つめた。

数日後の夜、影時間

タルタロス内。

「これ……。こないだのお礼ってことだ…」

エントランスにて、ハム子は照れながら真田にチャック式の財布を渡した。

「ん？俺にか、すまないな」

「いつ、いいえ……」

真田はハム子から財布を受け取った。

それを見たゆかりが、キタローに、どーしたのアレ？と聞いていた。

「どうでもいい……」

素っ気無い態度でキタローはヘッドフォンを耳に当てて、ポータブルプレイヤーのスタートボタンを押した。

……………

ハーフタイム

『影 お兄さん3 〳八十稲羽編その1〳』

「なんとか、昨日は満月の日をクリア出来たな」

美鶴 が登校中のハム子を呼び止めた。

桐条美鶴：生徒会長かつ、桐条グループの財閥嬢。初期のアナライズ担当。本編の根幹に関係あるけど、ネタバレになるから書かない。普段は冷静沈着だが、ところどころで世間離れしており、発想がぶっ飛んでいる。口癖、ブリリアント！

「そうですね」

「しかし、今回はストレガの妨害がなかった……。これが不気味で仕方ない……………」

美鶴は不気味に思った。

「あのアナライザーのチドリって子が居ないからじゃないですか？」
「そうだと思いたいな……。とにかく、奴らの動向には細心の注意を払わねばな……………」
「はい」

ハム子と美鶴は話ながら学園に向かった。

一方、その頃、ストレガのタカヤとジンは……………。

「ふふふ、とうとう到着しました……………。昨日、奴らに妨害しに行かないで早く休んだのが正解でした……………」

「ああ……………。なかなか、着くまでの車窓も、ええ景色やったわ……………」

タカヤとジンは不気味に微笑む。

なんと、二人は八十稲羽市に温泉旅行に来ていた。
駅前に立って、ジンはおもいきり背伸びをした。

「いやー、空気がうまいわー。都会の濁った空気と違って、空気が澄んどるわ。チドリも連れてきたかったわー」

「早速、駅をバツクに記念写真を撮りましょう」

「おっ、ええでー」

タカヤはカバンから、インスタントカメラを取り出した。

「その方……………、すみませんが、シャッターを押していただけな

いでしょうか？」

タカヤは、たまたま駅前を歩いていた一人のヤンキー風の中学生を呼び止めた。

「えっ？いいツスよ…」

ヤンキーの中学生は、タカヤからインスタントカメラを預かった。タカヤとジンは駅を背景にして、カメラの前にピースしながら立った。

ヤンキー風の中学生は、シャッターに指を置いた。

「んじゃー、準備はいいツスかー？」

「はい、いいですよー」

「ほな、よろしくな」

「はい、チーズ！」

カシャッ！

ヤンキー風の中学生は、タカヤとジンの写真を撮った。

「ありがとうございます」

タカヤはヤンキー風の中学生から、インスタントカメラを返してもらった。

さらに、タカヤは……。

「ちなみに、ここから『天城屋旅館』はどのようにして行くのですか？」

「ああ、そこなら、商店街のバスから乗った方が早いツスよ。商店街の道は……」

「そうですかー」

ヤンキー風の中学生は、親切に答えた。

「わざわざ、丁寧にありがとうございます」
「おおきに」

タカヤとジンは、ヤンキー風の中学生に礼を言った。

「いや、礼なんていいツスよ……。大したことしてねえし……。んじや、お気を付けて」

ヤンキー風の中学生は、照れ臭そうにして去って行った。

タカヤとジンは、さっきのヤンキー風の少年の親切な対応にホクホク笑顔だった。

「ふむ、見た目は悪そうな感じでしたが、なかなか純粹で優しい少年でしたね」

「ああ……。ホンマ、人は見かけやあらへんなー」

「さて、早速、商店街に行ってみましょうか」

「おおー」

二人はバツクを携え、商店街へと足を向けた。

この時の二人は知らなかった……………。

さっきのヤンキー風の中学生は二年後、この街と、世界を救うために戦うのを……………。

さっきのヤンキー風の中学生こと、巽完二も知らなかった……………。

さっきのジヨニーデップ似のお兄さんと、関西弁のお兄さんが、この世界を崩壊させようとしていたことを……………。

続
く

真田先輩の財布がマジックテープ式だった…（後書き）

私の財布も、マジックテープ式です。

テレッテー、テー、らんらんるー！！

「なあなあ、キタロー！しりとりしねえか？」
「……………」

昼休み。

席に着いて音楽を聴くキタローに順平 が話しかけてきた。

伊織順平：ペルソナ3メンバーの一人。あだ名、レベルアップすると、テレッテーと言ったため『テレッテ』。よくキタローに八つ当たりする。

「よーし！じゃあ、語尾に『ん』がついたら終わりな！俺から行くぞ！んじゃあ、俺のペルソナ、ヘルメスの『ス』のだけぜ！」

順平は勝手にしりとりを開始した。

キタローは、ヘッドフォンを外した。

そして、キタローは嫌な顔をしながら口を開く…。

「す巻『き』……」

「おおつ、『き』かよ。なら、俺はー、キングフロストの『と』ーだぜー！！」

「東京湾に沈め『る』……」

「『る』かよー。よし、なら、コードギアスのルルーシ『ユ』だ！」

「雪山に放『ち』……」

「よし、『ち』だな！地きゅ『う』だぜー！」

「宇宙空間に放り出『す』……」

「『す』かよー。なら、（今話題の）すいらー『く』だぜー！！」
「空気読『め』……」

「よし、来た！！『め』なら、女神転生の『い』だぜ！！」
「いいかげんにし『ろ』……！！！」

「『ろ』かよー！！なら、『ロバ』の『バ』！！！」

「バー『カ』！」

「仮面ライダー、デイケイ『ド』！！！」

「どっか行『け』！」

「けむ『し』……！！！」

順平が『けむし』と言った瞬間、キタローは大きく息を吸った。

「しばく『ぞ』ツツ……！！！」

それはとても、とても大きな声で………教室中に響き渡るくらいに、キタローは大きな声で叫んだ。

「ゾマホ……、『ん』って、ああっ……！！！」

順平は、語尾に『ん』をつけてしまった。

順平は頭を抱えた。

「くっそうー、俺の負けかよー！」

順平はため息を吐いた。

「なあ、ところでキタロー……？」

「……………」

急に順平は、真面目な顔をしてキタローの前に立った。

「もしかして、お前……………俺のこと嫌い？」

順平の問いに、いい笑顔でキタローは頷いた。
このあと、リアルファイト突入。

.....

ハーフタイム

『影 お兄さん4 く八十稲羽編その2』

八十稲羽に温泉旅行に来たタカヤとジンはバスに乗ろうとしたが、まだバスが来なかったため、バスが来る時間まで『愛屋』で昼食にすることにした。

タカヤとジンはテーブル席に座った。

カウンター席では、緑のジャージを着た女子中学生が座っている。お客のようで、肉丼をガツガツ！と美味しそうに食べている。

ジンはメニュー票を手を取った。

「タカヤはなんにするー？」

「うぬー、初めて来た店ですからねー。無難にラーメンか、あるいは冒険して変ったメニューかー.....、んー」

タカヤは腕を組んで悩む。

ジンはイライラしてきた。

「はよ、しろや.....。ホンマ、優柔不断やなー」

「仕方ないでしょうー、はじめて来た店って緊張しますし」

「緊張って.....、おま、それでもニユクス教の...」

「ちよっと、ジンー!!」

タカヤはジンの口を塞いだ。

以下、小声で。

(ここで宗教の話はやめなさいよ!!)

(そやった、すまん……)

(まったく、ニユクス教だけじゃなく、宗教関係の話は、至って危険なんですよ……。まったく、どこで、誰がなにを聞いてるか解らないもんなんですからね……)

(せやかて、すまんで……)

タカヤはカンカンだ。

すると、カウンター席の緑のジャージの女の子がタカヤとジンの方に振り向いた。

「お兄さん方、ここは肉井がオススメですよー」

と緑のジャージの女の子は言った。

すると、タカヤは……。

「あつ、なら、それにしましょうー」

「なら俺も。おっちゃん、肉井二丁なー」

ジンは手を挙げて注文した。

「すまん、嬢ちゃんー。この兄ちゃん、優柔不断でなー」

「コラッ、ジン。余計なこと言わないでくださいよ!!」

ジンは女の子に礼を言い、タカヤは顔が赤くなった。

「いえいえー。ここの肉井は旨いですからー」

緑のジャージの女の子は笑いながら言うと、再び、肉井に向かった。

ジンは、おおきに……と言って女の子に手を振り、そして、タカヤの耳元に近づいた。

以下、小声。

(タカヤ、なかなか可愛い子やなー)

(コラコラ……、ジン。ふしだらな考えはおやめなさい)

(そないなつもりで、ゆーたんやないわ。わしゃ、ロリコンちゃうで)

(どーですか……。最近、あなたが『ラブプラス』買ったの知ってるんですからね……)

(……！)

「まったく、夜な夜な、ラブプラスでニヤニヤして……、こないだ、『アマガミ』買ったばかりじゃなかったのですか？」

「それ以上、ゆうなや……！」

ジンはタカヤの首を掴んだ。

「誰のおかげで、ゲーム出来ると思ってるんです……！こないだの電気代、ありえなかつたですよ……！」

タカヤは青筋を立てた。

こうして、二人は取っ組み合いの口喧嘩を始めた。

店内にドガバギ……！と騒音が響く。

「おっ、お客さん！なにしてるアルか……！」

店主が二人の喧嘩を止めに行った……。

一方、カウンター席に座る緑色のジャージの女の子こと、里中千

枝は……………。

「うんまー!! やっぱ、肉はあたしを裏切らない!!」

と、肉丼を美味しそうに頬張るのだった。

公の知らない物語（前書き）

いつものことですが、今回はわかる人にしかわからないネタ仕様なので、あらかじめ謝っておきます…。なお、本日は今作の原作であるPPPが発売日ですので宜しくお願ひしますと同時に、作者がPPPプレイのため、今後は更新が隔たります…。

公の知らない物語

「今日は、『君の知らない物語』で決めてみるかな……………」

趣味の一人カラオケしにカラオケ屋に来たギターローは一室に座り、選曲リストを眺めていた。

！？

隣の部屋から、イントロが聞こえてきた。

(これ、マクロスFのオープニングじゃないか…………)

どうやら、誰かがマクロスFの主題歌を歌うらしい…。

まあ、隣がなにを歌おうが、どうでもいい…………とギターローは思っている…………。

「きみー、は誰とキスをするー」

(えっ!?)

ギターローは仰天した。手から選曲リストを落とすほどに。

隣の部屋の人は、まるで本人かと思うくらいに上手にマクロスFの主題歌を歌っている！

「あたしー、それともー、あの娘ー」

(う、上手すぎる!!!カラオケとかいうレベルじゃないだろ、これ!!)

思わず、ギターローは壁に耳を当てて、隣の部屋の熱唱を聞き入ってしまった。

数分後…。

隣の部屋は歌い終わった。

(思わず、フルで聞き入ってしまった…)

あまりに隣の歌が上手かったので、我を忘れてしまったギターは仕切り直して、また選曲リストを眺める。

すると……………。

)

!?

隣の部屋から、またイントロが聞こえてきた。

(これ90年代のロボアニメ、天空のエスカフローネ(今の子、知ってるかな…)のオープニングじゃないか……………)

まあ、隣がなにを歌おうが、どうでもいい……………とギターは思っている…。

「君をー、君をー、愛してるー」

(なんだとお!?)

ピリッ…!

ギターはまた仰天した。持っていた選曲リスト(電撃魔王3冊ぐらいの厚さ)を引きちぎってしまうほどに。

隣の部屋の人は、まるで本人かと思うくらいに上手に天空のエスカフローネの主題歌を歌っている!

「君がくれた大切なー、強さだからー」

(う、上手すぎるだろ!!!なにこれ、本人が光臨してんの!?)

またキタローは壁に耳を当てて、隣の部屋の熱唱を聞き入ってしまった。

数分後…。

隣の部屋は歌い終わった。

(また、フルで聞き入ってしまった…)

あまりに隣の歌が上手かったので、我を忘れてしまったキタローは冷静さを取り戻すため、口に懐かしのブルーペシを入れた。
すると……………。

）

！？

隣の部屋から、またイントロが聞こえてきた。

(はっ、これはラーゼフォンの！？)

何故、マイナーロボアニメばかりと思いつつも、キタローは驚いている。

「君が流す涙」

(サヨナラ、アヤトクン!!)

ブハツ！バリッ！！ドガン！！

キタローは仰天した。口からブルーペシを吹き出し、持っていたグラスを握り潰し、更にはテーブルを真っ二つに割ってしまうほどに。

隣の部屋の人は、まるで本人かと思うくらいに上手に劇場版ラーゼフォンの主題歌を歌っている！

「守りたいー、あなただけをー」

(やっば、本人だろ！！本人しか考えられん！)

またまた、キタローは壁に耳を当てて、隣の部屋の熱唱を聞き入ってしまった。

壁にひびが入った。

数分後…。

隣の部屋は歌い終わった。

(まさか、隣に本人が来ているのか…)

あまりに隣の歌が上手かったので、我を忘れてしまったキタローは部屋から出た。

キタローは、たまたま持っていた適当な紙とサインペンを片手にノックもせずに隣の部屋に突入。

「サイン下さい！！！」

と叫ぶ、キタロー。

そこに居たのは……………。

「あつ、キタローさん」

「……………」

マイクを持つアイギスの姿だった。

アイギス：ペルソナ3主人公こと、キタローの運命を定め、彼を最期まで守り続けたキーキャラクター。対シャドウ用兵器のロボットではあるが、徐々に人間らしく成長して行き、物語を感動のラス

トに導いたペルソナ3真のヒロイン。メンバー中、二回もフィギュアが出されるなど、特に人気の高い。

キタローは呆然とした。

「なにをやっているの…?」

「一人カラオケであります。ゆかりさんから教えてもらいました」

確かに、部屋にはアイギス以外は居ない。

「歌上手だね……………」

「そうでありますか?ただ、流れてくる音楽の音程を分析し、それに合わせて声を出しているだけです。それに何故か、坂 真綾さんの歌は上手に歌えるであります」

「本人かと思っちゃったよ……………」

「ありがとうございます」

アイギスはペコリと礼を言った。

キタローはサインペンを廊下に、アイギスに見えないように廊下に投げ捨てた。

「じゃあね…と、手を振ってキタローは部屋から出ようとした……………」

「待って下さい」

アイギスはキタローを呼び止めた。

キタローは足を止めて、彼女の方に顔を向ける。

「一人カラオケはストレス解消になると、ゆかりさんから教えられました……………。確かに、声を出せばストレスは解消されますが、なにか、こーう物足りないというか……………。……………なんとさえいい

のか……。やはり、物足りないといいますが……」

アイギスの表情は寂しげだ。

「すみませんが、キタローさん……。一緒に居てはくれないでしようか……。？」

まっすぐに、アイギスはキタローに言った。

彼女の言葉にキタローは頷かなかった……。が、無言のまま席に座った。

「……………！」

アイギスは、ソファで足を組むキタローを嬉しそうな表情を浮かべて見つめた。

キタローは澄ました顔で、テーブルにある選曲リストを手にとった。

「一緒に居てくれるでありますか？」

「どうでもいい……」

「それって、拒否しないってことありますか？」

「……………」

「ふふっ……」

言葉が詰まったキタローを見て、アイギスは笑った。

隣の部屋から、イントロが聞こえてきた。

(これ、化物語のオープニングじゃないか……)

どうやら、隣の誰かが化物語の主題歌を歌うらしい…。

まあ、隣がなにを歌おうが、どうでもいい……とキタローは思いながら、なにを歌おうか悩んでいるアイギスを見つめた。

「どこまででも、続くー、この空のよなー 終わりのないー」

ちなみに、隣で歌っているのでは……アイギスの妹、メティスだ……。

……………

ハーフタイム

『ペルソマン（銀魂のギンタマンのリズムで）』

歌：yo - s u k e

「ペルソマンー！！ペルソマンー！！

ペ、ペ、ペ、ペ、ペ、ペ、ペルソマンー！！

影の時間をどこまでも走り続ける

出現先はどこ！？

倒すのは楽じゃないー

やる気ねえよ！キタロー（どうでもいい……）

相手選べよ、ハム子ちゃん！（テレッテーー！！）

ペルソマンー！！ペルソマンー！！

ペ、ペ、ペ、ペ、ペ、ペ、ペルソマンー！！

スパークキングー！！」

「
……」

マヨナカテレビの、この映像を見た陽介とクマは黙った。

「ヨースケ、本日、PPP発売だから、もう寝ようクマよ……」
「うん……」

陽介とクマは電気を消した。

公の知らない物語（後書き）

最近は本当にロボアニメ少ないな…。

小悪魔ニユクス(前書き)

元ネタ「こっつええ感じ」ゴレンジャー

小悪魔ニユクス

2009年某月某日(日)

昼間

乾とコロマルが、辰巳ポートランドを歩いていると…。

「ふふふ…、見つけましたよ…。愚かなペルソナ使い…」
「おっ、お前は…！」

いきなりストレガのタカヤが2人の前に現れた。
！？

そして、前フリもなくタカヤが乾とコロマルに襲い掛かってきた。

「うっ、うわぁ…！」

乾が叫んだ。

すると…、誰かの足音が…。

「待て…！」

と誰かが叫んだ。

「誰ですか！？私の邪魔をする者は…！」

タカヤが振り返ると、そこには……………。

「アオレンジュアイ…！」

いつもの学生服を着た順平がポーズを決めた。
次に、ゆかりがいつものカーディガンを着て前に出た。

「モモレンジュアイ！」

ゆかりはポーズを決めた。

次に、美鶴が制服姿で前に出た。

「モモレンジュアイ！」

とサーベルを持って、美鶴がポーズを決める。

次に、ハム子が…。

「モモレンジュアイ！」

とナギナタを持ってポーズを決めた。

次に、真田がいつもの制服姿で…。

「アオレンジュアイ！」

と、ファイティングポーズを決め叫んだ。

最後に…。

「5人揃って、月光館戦隊！」

と順平が言ったのに続いて、みんなが叫んだ。

「……………ペルソナレンジュアイ！」「……………」

そして、全員でポーズを決めた。

「…」

タカヤが呆然としている…。

「さあ！早く逃げろ！！」

「ありがとうございます！」

「ワンワン！」

と真田が乾とコロマルを逃がした。

そして、全員でタカヤに向かい構えた。

「よーし、覚悟しろ！」

「覚悟なさい！」

「ただちに迎撃する！」

「ふっ、ダウンさせてやる！！」

順平、ゆかり、美鶴、真田はタカヤを睨んだ。
すると…。

「ちょっと、待ちなさい…」

タカヤが構えてるみんなの前に出た。

そして…、タカヤは順平に指をさした。

「あなた、何色？」

順平はポーズを決めながら…。

「見りゃわかんだろっが！アオレンジユアイ！！」

次に、タカヤは真田に指をさした。

「あなたは？」

「アオレンジユアイ！」

真田はポーズを決めて叫んだ。

「5人揃って…」

真田がそう言うと、みんなが続けて…。

「…………月光館戦隊！ペルソナレンジユアイ！！」「…………」
「待ちなさい！」

すると、タカヤが叫んだ。

タカヤは今度はゆかりと美鶴、ハム子に指をさした。

「あなた方は、何色…？」

すると、ゆかり、美鶴、ハム子は…。

「モモレンジユアイ…」

「モモレンジユアイだ」

「モモレンジユアイ…」

と、みんな答えた。

「5人揃って…」

真田がそう言うと、みんなが続けて…。

「……月光館戦隊！ペルソナレンジュアイ！！」

と叫んだ。

「待ちなさい！待てよ！なんで、青二人に桃色三人なんですか！！
おかしいでしょう！！」

タカヤがキレながら叫んだ。

……。

タカヤの言葉に、みんな黙り込んだ…。
すると、美鶴が……。

「わたし達は一人一人の個性を見てほしいから、色がダブっただけ
だ…」

「色がダブってちゃあ、余計、個性見れませんよ！！」

タカヤは青筋を立てた。

そして、タカヤは順平、真田に指をさした。

「まず、あなた達！なんで、青二人なの！？」

順平が前に出た。

「いや、俺って、こークールで、青が似合うから、アオレンジュア
イって感じじゃーん！」

タカヤは順平から一瞬で視線を変えて、真田に首を向けた。

「じゃあ、あなたはなんで青なの？」

「なんでだろうな……」

「理由はないのですか……」

ツツコミにくい返しに戸惑いながら、タカヤは今度、ゆかり、美鶴、ハム子に指をさした。

「あなた達は、なんで桃色なんですか……？」

「いや、あたし……、着ているカーディガンがピンクだったから……」

ゆかりは至って、普通に言った。

「私は、なんていうかアダルトイで、ピンクな感じだろ……」

「一歩間違えれば危ないですよ、その言い方……」

美鶴の言葉を聞いた後、タカヤはハム子を見た。

「で、最後にあなた……は？」

「あつ、あたしですか!？」

ハム子は戸惑った。

「P3Pでのあたしのイメージカラーだし……。それにゲーム画面もピンクになって……」

「そういう、見も蓋もないことを言わない」

タカヤは腕を組んで、大きく息を吐いた。

「まったくなくてませんよ、あなた達！色はバラバラだし、それに、桐条さんしか上手いボケが出来ていませんよ」

この言葉に、順平、真田、ゆかり、ハム子はガツカリした。美鶴は勝ち誇ってる。

「じゃあ、次はしっかり決めて下さいよ…」

「はい…」

全員でタカヤに頭を下げた。

「お疲れさまでしたー」

「はい…、お疲れ様です…」

こうして、みんな現地解散した。

タカヤだけが残った…。

(私ってこんなキャラだっけ…)

タカヤは頭を抱えて塞ぎ込んだ。

……………

ハーフタイム

『荒垣先輩の影時間お料理教室』

キッチンの前に、エプロンをした荒垣 が居る。

荒垣真次郎：老けて見えるが真田、美鶴と同期のペルソナ使い。家事が得意で、動物好きなチヨイ怖系兄さんキャラ…だが、終盤はネタバレ的な理由で…。

テレビカメラを前にして、荒垣は営業スマイルだ。

「ども…、今日は…、栄養満点、プロテイン料理を作ります…」

荒垣はいつもより、1オブラート高い声で挨拶した。

「材料はこの通り…。大量の粉末のプロテインを使います…」

と、荒垣はだるそうに材料をまな板の上に置いた。

プロテイン…、プロテイン…、プロテイン…。

見事なまでに、プロテインの缶しかない…。

荒垣はスプーンで、プロテインをすくった。

そして、皿に盛る。

「はい、この通り…、皿にプロテインを盛ります…」

荒垣は皿にプロテインを、砂遊びの要領で盛る…。

更に、皿に盛る…。

また、更に皿に盛る…。

こんもり…と、皿の上に山盛りのプロテインが盛られた…。

そして…、荒垣は山盛りになった粉末プロテインの皿をカメラの前
前に置き…。

「はい、完成…。名付けて、『ペガサス昇天プロテイン盛り』…。

また、来週…」

と云って、番組を終了させた。

パチ、パチ…。

濁いた拍手が響いた。

小悪魔ニユクス（後書き）

P3PはPS2版で感じた不満が、見事に解消され、サクサクとプレイ出来て面白いです。基本的にストーリーは変わってませんが、新要素の女性主人公が優しく明るい子でコミュ活動が楽しく、オススメです。

ルナトリガーが倒せない！（前書き）

元ネタ「ピューと吹くジャガー 珍笛アイデアの回」

ルナトリガーが倒せない！

夜

美鶴から呼び出され、作戦会議室のソファーにみんなが腰を掛け
ている。

なんの集まりかは、皆、なにも聞かされていない。

ただ、今日の美鶴はピリピリしてて、緊迫したムードだった…。

「お前達…。召喚器について、不満があるらしいな…」

！？

美鶴が第一声にそう言った。

「えっ…」

皆、啞然とした。

テーブルの上に、美鶴は召喚器 を置いた。

召喚器：なくてはならない今作のペルソナを呼び出すための銃型の召喚器。これを頭に突き付け、撃ち抜くことでペルソナが出現する。1、2は普通に背後から出現し、4はカードを割って出現するが、3は絵的に気合い入れて自殺するように見える。なお、ちゃんとした理由があり、頭に突き付けた銃の引き金を引くことで恐怖を克服するという概念がある。

「伊織…！なにが不満か、言ってみろ…」

「はっ、はい！」

いつもより低い声色の美鶴に、順平は起立で立ち上がった。

「えっと…、まず…。なんで、銃の形なんでしょうかと…。正直…
…、頭に銃を突き付けるのって…」

順平の言葉に、美鶴の目が光った。

「ひいひい!!」

順平は頭を抱えて、ソファアに塞ぎ込んだ。
すると、ゆかりが手を挙げた。

「はい!」

「なんだ、岳羽…」

ゆかりはソファアから立ち上がった。

「あたしも順平と同意見です…。いや、だって、銃を頭に突き付け
るんですよ…。慣れるまで…。最初は…。普通の神経じゃ無理
です…。…」

ゆかりの言葉に、最初から、なんの無理なく銃を頭に突き付けら
れたキタロー、ハム子、風花の顔の影が濃くなった…。
すると、順平が再び立ち上がった。

「そつ、そつすよ!それに、コロマルの召喚器は首輪じゃないっ
すか!?犬だから銃を引けないとはいえ、銃じゃなくても、ペルソ
ナ召喚出来るじゃないっすか!?!」

順平はコロマル に指を差した。

コロマル：見ての通り、犬。シリーズ初の動物のペルソナ使い（
4はクマ吉）。意外と万能で、アギ系ムド系において最強クラスで

回避率も高い。首輪が召喚器になっている。

順平の言葉に、真田は反論した。

「ばかやろう！召喚器が首輪だったら、俺たち、カツコつかないだろ！？」

「カツコいいとかの前に、拳銃を頭に突き付けるのが怖いんですよ！」

ゆかりが、さらに反論した。

「要するに、君たちは…、なにが言いたい…」

美鶴はゆかりに威圧的な態度で言った。

さらに、ゆかりも高圧的な態度で言う…。

「召喚器を…、拳銃じゃなく………、別のにしてください………！」

！？

全員の顔が固まった。

真田は立ち上がった。

「なにを言っているやがる！！拳銃の形には、わけがあつてだな………！」
「落ち着け！明彦！」

美鶴は冷静に真田をなだめた。
そして…。

「わかった……。いいだろ………」

！？

なんと、美鶴はすんなりとゆかりの意見を受け入れた。
これには、皆、騒然とした。

真田は凄い勢いで美鶴の方に首を向けた。

「なっ、なに！」

「実は、わたしも変えたいと思っていた……。夏休みに、神社で祭りがあつたら……。…」

美鶴は苦い顔で、急に回想を始めた……。

数ヶ月前……。

神社で祭りをやっており、真田、アイギス、美鶴の3人が出店を歩いていた。

その時、真田は射的の出店を見つけた。

「おっ、美鶴、射的屋があるぞ……」

真田は指を差した。

「射的……？なんでありますか？」

アイギスは、ポカーンとした。

その様子を見て、真田は笑いながら射的を説明した。

「棚に並べられた景品を、このおもちゃの銃で撃って落とすと、景品をもらえるんだ」

「どれ、見本として、わたしがやってみよう……」

と言って、美鶴は自信満々に射的屋に向かった。
そして……。

「気付いたら、その射的屋の銃を自分の頭に向けていたというわけだ……」

美鶴の回想に、みんなが言葉を失った。

真田は下を向いた……。

「ああ……、そんなこともあったな……」

「あれは、ジャパニーズジョークだと思ってましたが、素でしたか」

アイギスの言葉に、美鶴は更にガツクリした。

「だから……。変えようとは思っ……。しかし、どのような形がいいか、皆に案を出してもらおう」

と言って、美鶴は気を取り直しながら、皆にフリップボードを配った。

「えっ、自分たちで決めろって言うのですか!？」

ゆかりが困惑した。

「言い出しっぺは、君らだろ…?」
「ぐっ…」

美鶴は勝ち誇った顔し、ゆかりは苦い顔をした。

「じゃあ、みんな、どんな召喚器がいいか、フリップボードに書いて挙げていきたまえ、一番良かったのを採用しよう…」

と美鶴が言ってから、皆はフリップボードに新しい召喚器の案を書き始めた…。

果たして、新しい召喚器はどうなるのか？

……………

CMタイム

『ジュネスは、毎日がお客様感謝デー！来て、見て、触れてください！エブリデー、ヤングライフ、ジュ、ネ、スー！』

……………

「よし、CMが明けたから、早速、みんなの意見をきこうか」
「なに言ってるんだ…、お前…?」

みんながフリップボードに案書き終わった後、CMとか言い出した美鶴に真田は困惑した。

今日的美鶴さん、変であります…とアイギスは思った。

「まずは、主人公のギターからだ……」

と言われ、ギターはフリップボードを、みんなに見せた。
ギターのフリップボードには『注射器』が書かれている……。

……。
ギターの案に、みんなが固まった。

すると、美鶴が……。

「なるほど……、その発想はなかった……」

(ええ~~~~~ツツツ!!!)

と絶賛しながら、美鶴はメモしはじめた。

「いいんですか、あんなんで!？」

「2009年は、その関係の事件多かったから、かなりNGですよ
!」

「ていうか、想像したら、すんげえ嫌な絵図だわ!!」

ゆかり、風花、順平は、嵐のように非難した。

真田は、グラップラー刃牙のジャック・ハンマーを思い出した……。

そして、地味に、この場に居る荒垣は苦い顔をして、みんなから顔を反らした。

「クスリ、ダメ絶対……であります……」

「ペルソナシリーズは、薬物の問題について真剣に考えています」

アイギス、ハム子はカメラ目線で言った。

「とにかく、それダメだから！薬物を連想させるし！」

ゆかりはキタローのフリップボードを掴んで投げた。
それを見て、真田は……………。

(じゃあ、これもダメだな……………)

真田はフリップボードに、カプセル状のプロテインを飲んでペルソナを召喚する案を書いたがマジックで塗り潰した。

「じゃあ、次は…、天田…」

「あっ、はい。僕のは…、至って、シンプルに…」

乾 は美鶴に指をさされながら、フリップボードを皆に見せた。

天田乾：乾と書くが『けん』と読む少年のペルソナ使い。変換が面倒なため、作者は『いぬい』で変換している。どこか、子ども扱いされるのを嫌がり、どこか背伸びをしている。後半、とんでもない展開に加速させる……………。

「こー、メガネとか…」

乾のフリップボードには、メガネが書かれていた。
すると、美鶴は……………。

「ブリリアント…！」

大絶賛した。

「なるほど、メガネなら、確かにシンプルだ！」

「それでいて、ちょっとオシャレだし！」

「やるじゃん、天田君！」

「へへっ……」

真田、風花、ゆかりも天田の意見を絶賛した。だが、キタロー、ハム子は浮かない顔をした。

「どうしたでありますか？お二人さん……」

アイギスがそう聞くと……。

「……………」

「数年後あたりに必要になるから、今はメガネはNGだと思う……」
「？」

キタロー、ハム子は変な不安に襲われていた。美鶴は珍しくテーションが上がってきた。

「よし、天田！なかなか、いい案だったぞ！！次は山岸！」

「あつ、はい！あたしのは、日曜朝の番組を参考にしてですが……」

風花が書いたフリップボードには、携帯電話が書かれていた。更に、美鶴のテーションが上がってきた。

「グレート！！次、岳羽！」

「あたしも風花のと似てるんですが……………、今日曜朝にやってる……………」

ゆかりのフリップボードには、パソコンの小型HDメモリーが書かれている。

「エクセレントー！すごいぞ！みんな！さすが、修羅場をくぐってるだけあって、発想がブリリアントでエクセルン！クールだ！」

美鶴は、みんなをかなり褒めちぎった。

彼女のテーションは、かなり上がっていた。

かなり、みなぎってきている。

それを見て、順平は笑った。

（ふふふ、桐条先輩ってば、あんなにテーション上がっちゃって…。よし、ここは俺の案で、さらにテーションを上げてやるか…）

と思いながら、順平は手を上げた。

「はいはい！次は、俺の案っす！」

「どれ、見せてみる！」

順平はフリップボードをテーションが上がっている美鶴に見せた。フリップボードには、剣が書かれている。

「じゃじゃーん！俺様の案は、剣を握ることによって、ペルソナが

……」

「それは面白くない」

順平は本棚の隅で、体育すわりした。

美鶴は、急に冷静になった。

そして、ハム子の方を見つめた。

「はい、次。ハム子…」

「えっと、あたしのは…。順平と被るんですが…」

ハム子はフリップボードを、みんなに見せた。

……。
拳銃が書かれていた…。

……。
……。
……。
皆、沈黙した。

そんな中、アイギスの口が開いた。

「つまり、結局は、いつもどおりの拳銃型がいつてわけでありま
すね」

「うん。やっぱり、召喚器はこれ以外、思いつかないって言うか…」

アイギスの言葉に、ハム子は頷いた。

すると…、ゆかりは観念したような表情をして自分の召喚器を取
り出した…。

「はあー、だよな…。なんだかんだで、この召喚器にも愛着ついち
やったし…。ほら、見て、この傷…。ここは、最初の襲撃があっ
て…」

ゆかりは召喚器の傷を、みんなに見せた。

すると、ハム子はそれを見て笑った。

「あははっ！懐かしい！」

「あたしのもね、結構…」

風花も自分の召喚器を取り出した。

ハム子、ゆかり、風花は、自分の召喚器を手にとって思い出話に

花を咲かせた。

それを見て、キタローは立ち上がり…。

「結論が出たみたいだから、もう、どうでもいい…」

と言って、耳にヘッドフォンを当てて作戦会議室から出た。
すると、美鶴も…。

「ふふっ…、確かに結論は出たな」

「ああ…」

と笑いながら、満足した表情を浮かべた。

他のみんなも納得し、満足した表情をした。

こうして、この召喚器論議の結論は、今までどおり…という形で幕を閉じた。

「これにて、一件落着……………であります」

とアイギスが言うと、皆、清々しく笑うのであった。

順平、以外。

……………

ハーフタイム

『影 お兄さんさ 〳八十稻羽編〴〵』

前回、些細なことで喧嘩をしてしまったタカヤとジンであったが、二人はホームランバーを買って仲直りするのであった。

そして、二人は天城屋旅館に到着し、温泉を堪能した。

「いやー、いい湯でしたー」

タカヤは浴衣姿のホクホク笑顔で言った。

「やー、生きかえるわー」

と、ジンが言うと…。

「本当に、ペルソナに蝕まれた、この身体が生き返れたらいいのに…」

「あつ、すまん…。そんなつもりで言ったじゃ…」

タカヤは落ち込んだ。

すると、二人の前にショートカットの制服姿の少女が現れた。

「あつ、あの…。タカヤさん、ジンさんですね？」

「はい、なにか？」

「お料理の支度が出来ましたので…」

と少女は言った。

「おおー、そうですかー」

「ほな、行くか。おおきに」

タカヤとジンは少女に挨拶をして、部屋に向かった。

「いやー、かなり、べっぴんやったな…」

「あなたは、本当、いちいち女子に反応しますね…」

二人は話ながら廊下を歩く。

「さっきの制服の少女はお手伝いさんでしょうか？」

「にしても、この街のオナゴはレベル高いなー」

「ジン…、話聞いてます？」

二人は部屋に着いた。

ルナトリガーが倒せない！（後書き）

余談ですが、公式サイドでの女性主人公の名前、『月光ルナ子』ってなってますね……。個人的に、『ハム子』の方が印象的なので、今後も今作品の女性主人公の名前は、『ハム子』で…。

Darker Than Banchor ～ペルソナの契約者～（前書き）

元ネタ「仮面ライダーW」、
「マッチ売りの少女」

Darker Than Bancho (ペルソナの契約者)

『スーパーパーソナタイム』

2011年某月某日(火) 晴れ

昼間

ハードボイルド…。

この言葉は僕らのためにあるような物だ…。

今日もまた誰かが、事件を手土産に特別捜査本部に訪れる。

いつものことだ…、なんてことはない…。

僕はコーヒー(砂糖にミルクたっぷり)を片手に、依頼を受け入れる。

やれやれ…、今日もハードな1日が始まりそうだな…。

へい…、直斗…。また事件かい…と相棒は言う。

相棒…。彼は八十稲羽の番長と呼ばれている。カリスマ性、オーラ力、冷静な判断力、行動力、大胆さ…。どれをとっても申し分ない。なにより、趣味は、料理と冷蔵庫にある変な食べ物を食べることに来た。

口癖は…、『落ち着け』、『そつとしておこう』、『大切な物を失った気がする』…。

ふっ、ハードボイルドに相応しい言葉選びだ。

おっと…、紹介が遅れたようだ…。

僕の名は白鐘直斗。

ただのエリート少年探偵さ…。

「行こうか…、相棒…」

相棒が頷く。

ふっ、頼もしい限りだ…。

愛銃ボルジャーノンを指先でクルクルと回して、学ランの懐にし
まった。

僕は、人差し指を突き出しポーズを決める…。

「さあ、お前のペルソナを数えろ…！」

「一つです…！」

……。

エプロン姿の花村先輩が現れた。

白けた目で、ジュネスのテーブルの上立ってポーズを決める僕
らを見つめている…。

……。

「満足したか…！」

花村先輩にそう言われ、僕は顔を赤くして頷いた。

どうやら、まだまだ、ハードボイルドへの道は長いようだ…。

.....

CMタイム

『ジュネスは、毎日がお客様感謝デー！来て、見て、触れてください！エブリデー、ヤングライフ、ジュ、ネ、スー！』

.....

ペルソナ名作劇場

『プロテイン売りの少女』

「プロテイン……。プロテインいりませんか……？」

雪が降る寒空の街で、ハム子は歩く人々にプロテインを売っていた。

「そこのおじさん、プロテイン買ってくれませんか？」

「買っわけないでしょ！まったく！」

ハム子は時価ネットたなかの田中社長に、プロテインを売ろうとしたが断られた。

「プロテイン……。プロテインいりませんか？」

今日は、まったく一つも売れていないプロテインを見て、ハム子は目に涙を浮かべた。
すると……。

「よし、買わせてもらおう……」

!?

なんと、通りすがりの真田明彦がハム子の前に現れた。そして、プロテインを三個ぐらい買ってくれた。

「ありがとうございます!」

真田はなにも言わずに、札を渡して去って行った。クールに去って行く真田を見て、ハム子は思った。この話のオチはどうするの...?と...。

完
ッ
ッ
ッ
!!

.....

CMタイム

『ジュネスは、毎日がお客様感謝デー!来て、見て、触れてください!エブリデー、ヤングライフ、ジュ、ネ、スー!』

.....

10月23日 晴れ

午後

ジュネスフードコート。

「ドラマCD第2弾、発売を祝って!!カンパイ!!!」

パーン！パーン！と、自分（P4主人公）以外の自称特別捜査隊のみんなが、フードコートでクラッカーを鳴らした。

本日は、待ちに待ったドラマCD第2弾の発売日だ。

みんな、ドラマCD発売記念の祝賀会として、ビールかけならぬ、リボンシトロンかけをフードコートを貸し切って行っていた。

「ほれほれー、完二ー！！」

「ひゃあああ！！冷たいツスよ、センパーイ！！」

陽介は持っていたリボンシトロンを、完二の頭にかけた。二人とも、かなり舞い上がっている。

「カンパーイ！」

「カンパーイ！」

「カンパーイ！」

「カンパーイ！クマ」

「乾杯！」

千枝、雪子、りせ、クマ、直斗はリボンシトロンで乾杯をした。

「プハー！！」

千枝は、一気にリボンシトロンを飲み干す。

それを見て、りせとクマは笑った。

「あはっ！千枝先輩、いい飲みっぷり！」

「うっほほーい！クマも負けずにイツキ、クマー」

と、クマもリボンシトロンの缶を一气飲みし始めた。

すると、雪子は周りをキョロキョロと見始めた。

「そつえば、彼、遅いわね」

雪子がそつ言つと、直斗は腕時計を見た。

「ええ…、そつえば…。確か、今日、am zonからCDが届くので、自宅に取りに行ったはずなのに…」

すると…。

フードコート入り口から、足音が聞こえた。

その足音に先に、みんなが振り返る…。

……。

みんなが降り向いた先には、自分が居た…。

ラジカセを片手に、暗い表情をした自分の姿が…。

リボンシトロンで濡れた陽介と完二が、ニコニコしながら自分に近づいた。

「おーっ、遅かったな、相棒」

「先に始めさせてもらってましたッスよ」

……。

陽介と完二がポンポン！と、自分の肩を叩く。

「で、ドラマCDはどうした？そのラジカセに入ってるのか？」

陽介がそつ聞いた。

……。

自分は暗い表情を、まだ浮かべている。

「ほら、リーダー、早く！早く！」

「そうツスよ、もったいぶらないで早く、早く！」

千枝と完二は、ハリー！ハリー！ハリーアップ！と自分を急かした。

「クハー！」

「あはっ、クマ、いい飲みっぷり！！！」

クマ、りせは楽しそうにリボンシトロンを飲んでいる。

一方…。

「…」

「…」

雪子、直斗は先ほどからの自分の暗い表情から、なにかを感じ取った…。

…。

ブルブル…と自分のラジカセを持つ手が震えている。

なにも言わず、ただ暗い表情を浮かべる自分の様子にみんなが違和感を覚え始めた。

陽介、千枝、完二はなにも言わなくなり、りせ、クマはリボンシトロンをテーブルに置いた。

みんな、沈黙し始めた。

…。

…。

…。

しばらく時間が流れた。

すると、この空気に耐えられなくなった陽介が…。

「あつ、相棒……」

自分は陽介の方に顔を向けた。

「おつ、おい……焦らすのもいい加減にしるよ……。そろそろ、本気で怒んぞ……。もったいぶらずに、さっさとドラマCD流せよ……。そのラジカセには、ドラマCD入ってるんだらう？なあ？」

陽介は自分の襟首を握った。

それでも、自分は無言だ……。

すると……。

「早く流せよ！！」

陽介は叫んだ。

その声は、ジュネスフードコートに響いた。

……。

誰も陽介を止めようとはせず、ただ自分の襟首を握る陽介を黙って見つめているだけだった。

皆、言葉を失っていた……。

まだラジカセを持つ自分の手は震えていた。

そして、陽介はなにか気づいた。

「も、もしかして……」

すると、みんなもなにかに気づきはじめた。

また、陽介は叫んだ。

「おつ、おい！嘘だろ！嘘だろ！嘘だろ！嘘だろ……。これで、これで、二回目だぞ！！第1弾も延期したんだぞ！！第2

弾も延期って、あるわけねえだろ!!こんなのもって、こんなのも……
…。なあ、なんか言ってくれよ!!なあ!!」

陽介は目に涙を浮かべて叫ぶ。

そんな陽介に押し負けた自分は、とうとう口を開く……………。

新色、ペルソナ3ポータブル、絶賛発売中……………。
P3Pサウンドトラック、11月25日発売……………。
そして、P4ドラマCD Vol.2、2ヶ月延期して、12月2
3日発売『予定』……………。

自分の襟首を握る陽介の手から力が抜けた。

他のみんなも呆然とした。

そんな中、自分は持っていたラジカセの再生ボタンを押す……。

BGMが流れた。

『嘘』

あの日、見た空 茜色の空を
ねえ、君は覚えていますか？
約束、契り、初夏の風が包む
二人、寄り添った

無理な笑顔の裏
伸びた影をかくまう
だから、気づかぬふり、再生を選ぶ
テーブルの上の、震えない知らせ、待ち続けて
空白の夜も、来るはずのない朝も
全部、わかってたんだ

あの日、見た空 茜色の空を
ねえいつか思い出すでしょう
果たせなかった、約束を抱いて
二人、歩き出す

「うわあああああ！！！！！」

陽介は泣き叫んだ。

そして、他のみんなも泣き崩れた。

……。
……。
……。
……。

P4ドラマCD延期したけど、P3P絶賛発売中……。

Darker Than Banchō ～ペルソナの契約者～（後書き）

次回予告、『ギター、グルメキングとラーメン二郎に行く』。お楽しみに！

キタロー、グルメキングとラーメン二郎に行く(前書き)

クライマックス番長、ハナクロから通算して100話目記念作品。

キタロー、グルメキングとラーメン二郎に行く

「みなさん……………、こんばんはであります……………」

寮の作戦会議室。

アイギスは、制服姿でカメラの前におじぎをした。

他にも部屋の中には、いつもの制服姿のハム子、真田、乾に、私服の荒垣が。

彼らはソファーに座り、背後の壁には『さよなら、伊織順平君』涙の卒業式』と書かれた垂れ幕。更に、桐条グループから送られた多くの花束が飾られている。

「本来なら、『キタロー、グルメキングとラーメン二郎に行く』を放送する予定でしたが、急遽、番組内容を変更させて頂き、今日限りでペルソナ3メンバーから卒業となった伊織順平さんの卒業式をハム子さん、真田さん、荒垣さん、天田さんをゲストに迎え、放送させていただきます……………。なお、キタローさん、ゆかりさん、美鶴さん、風花さん、コロマルさんは、今日、用事があつて来られないとのことで来ていません」

アイギスが挨拶すると、BGM『蛍の光』が流れる。

というわけで、なぜか、いきなり伊織順平の卒業式が行われることとなった。

「それでは、本日を持って、ペルソナ3メンバーから卒業となった伊織順平さんの登場です」

アイギスがそう言うと、皆、ささやかに拍手をした。

レットカーペットを歩いて、カメラの前に順平が登場した。

いつもの学生服姿ではあるが、順平は帽子を外し、ペコリ…と頭を下げる。

「どうも、みなさん…。本日、ペルソナ3メンバーから卒業します
伊織順平です…」

今にでも、泣き出しそうな顔をして順平はカメラに挨拶をした。
アイギスはマイクを片手に順平に近づく。

「本日、卒業とのことではありますが…。何故、急に卒業となったの
でありますか？」

「はい…。この卒業は、自分の意志で決めました…」

順平は涙をこらえるように語り始めた。

それを聞いたハム子、真田、乾、荒垣は順平の方に首を向ける。

「どうして、ご自分で決めたのでありますか？」

「あつ、はい…。実は…、チドリって女の子が居ますよね…」

「はい、ストレガの…」

「実は……………」

チドリ の話題を出すと、急に順平の顔が赤くなった。

チドリ：ストレガの一員。ゴスロリのペルソナ使いで、アナライ
ザーと癒し能力がある。敵であり、どこか人形のように無感情な少
女ではあったが、順平との出会いにより人間らしく変わって行った。
ネタバレだが、本編で死を遂げてしまおうが、フェスでは生き返る。

「彼女が、『順平と一緒に居たい…』って言うんですよ…」
「……………」

順平は鼻の下を伸ばして言った。
ハム子、真田、乾、荒垣の顔が固まった。

「だから、なんでありますか？」

無表情だが、どこか口が引きつっているアイギスは更に順平を聞いた。

「いやー、だから一緒に居てあげなきゃダメかなーって、ふひひひひー！ってなわけで、タルタロスとか行つてたら、チドリと、『夜』、一緒に居られないじゃないっすかー。って、なに言つてんだ、俺えええー！、ふひひひひー！」

順平は上機嫌で言う。いつの間にか、涙をこらえてる素振りがない。

この言葉に、真田、荒垣は額に青筋を浮かべ、ハム子は顔が赤くなった。

すると、天田がハム子に首を向けて…。

「さっきの言葉って、どういう意味ですか？」

「……………」

乾は順平の言葉の意味を、ハム子に聞いたが無言で返された。

更に、アイギスの目が引き攣る。

「言ってることはわかるのですが……………。別にタルタロス行きは毎日じゃないので、やめる必要はないと思われでありますが…

……………」

「なに、言ってるのアイちゃんー！ずっと一緒に居たいって、チドリンが言ってるんだからさー、ねえー。だから、もうモモタロス、じ

やなくて、タルタロスとか行つてらんないのよー」

順平はアイギスの肩をポンポン！と叩いた。

真田、荒垣は顔に血管を浮き上がらせて拳をバキバキ…と鳴らし、天田はハム子に、さっきの言葉の意味をまだ聞いている。

……。

アイギスは順平に叩かれた肩の部分を手を払いながら、また顔をカメラに向ける。

「ええー、ここで、本日、順平さんの卒業式に来られなかったメンバー達からのビデオレターがあります…」

と言つて、アイギスは作戦会議室のスクリーンを操作して、ビデオの再生を始めた。

順平は笑いながら、スクリーンに目を向ける。

スクリーンには、『本日、桐条グループ主催のサンドウィッチパーティーに参加して来られなかった桐条美鶴さんからのメッセージ』とタイトルが出た。

そして、美鶴が映った。

美鶴はカンペを持って、堂々と、メッセージを言い始めた。

「えーっと、伊織君…、卒業おめでとう……。寮の引き払いについてだが、君が使ってた部屋を壁紙から床、天井、窓ガラス、ドアなどをすべて貼り変えておくから、その費用をうちの口座に振り込んでおいてくれよ…」

ブツッリ…。

美鶴のビデオが切れた…。

……。

画面には砂嵐が映る。

順平の顔が固まった。

「えっ、寮を引き払うってなんスか……。このまま、使わせてくれるんじゃない……。つーか、費用、俺持ちってなに!!」

順平は取り乱しながら、アイギスに顔を向ける。

「どうやら、美鶴が部屋を引き払う手続きをしていたのを知らなかったようだ……」。

だが、アイギスは無表情で、またビデオレターを流した。

スクリーンには、『本日、パソコンのHDDの整理で来られなかった山岸風花さんからのメッセージ』と出た。

そして、風花が映った。

「いつでも出来んだろ、そんなこと!!」

順平はスクリーンに映った風花にツッコんだ。

スクリーンの風花は、パソコンいじりながらメッセージを言い始めた。

「えっと……、順平君、卒業……あっ、ダメよ、コロちゃん!!」

いきなり、風花はコロマルを追いかけてスクリーンから消えた。

ブツリ……。

風花のビデオが切れた……。

……。

画面に砂嵐が映る。

順平の顔は更に固まった。

「次は、ゆかりさんのビデオレターであります」

次に、アイギスはゆかりからのメッセージビデオを流した。

スクリーンには、『本日、携帯の機種を変えに行って来られなかった岳羽ゆかりさんからのメッセージ』と出た。

そして、ゆかりが映った。

「あつ、えーと、卒業おめでと」

スクリーンに映るゆかりは書類を書きながら、メッセージを言っている。

すると、スクリーンの携帯ショップの店員が映った。

「えっと、お客様のご希望の機種は……」

「あつ、これで」

「はい、色はー」

「えっと、どうしょかなー」

ゆかりはメッセージそつちのので、普通に携帯の機種変更を行っている……。

ブツッリ……。

ゆかりのビデオが切れた……。

……。

スクリーンに砂嵐が映る。

順平の顔が、かなり固まった。

「キタローさんからのメッセージは、チラシの裏に書かれた赤い文字の『ジゴクニオチロ』以外はありませんで、ビデオレターは以上です」

アイギスはあくまで冷静に進行した。

順平は、なにで例えていいかわからない顔をした。

「続いては、ここにいらっしやるメンバーの皆様方からの花束とメッセージの贈呈です」

アイギスがそう言うのと、真田、荒垣、乾、ハム子は花束を持って立ち上がった。

そして、順平の前に立つ。

「みんな…」

順平は顔を切り替えて、また泣きそうな表情をした。

まず、先にハム子が順平に花束を渡す。

ハム子は、しみじみとしながら口を開く。

「えっと、卒業おめでとう…。そういえば、6月あたりにあんたが言ってくれた『お手上げ侍』ってネタは…、あたしがもらっておくから、この『お手上げ侍』が今年の流行語大賞になった場合、表彰されるのはあんたじゃなく、あたしだからね…」

順平の顔は固まった。

「それじゃあ、チドリさんと仲良くね…」

と言って、ハム子は順平に別れのメッセージを贈呈した。

順平は別れの握手をしようと、右手をハム子に差し出したが、普通に無視された。

ハム子はソファアに座る。

次に、乾が順平に花束を渡した。

そして、乾も別れのメッセージを言おうと口を開く。

「えっと…、僕は中盤からの参戦メンバーなので、順平さんとの付き合いは短いのですが…。その…、初めて、順平さんを見たとき…、なんていうか…、その、『華がないな』と思いました…」

順平の顔が固まった。

「えっと、卒業おめでとございます…」

と言つて、乾も順平に別れのメッセージを贈呈した。

順平は別れの握手をしようと、右手を乾に差し出したが普通に無視された。

乾もソファアに座る。

次に、荒垣が順平に花束を渡す。

そして、彼も別れのメッセージを言おうと口を開いた…。
だが…。

「あつ、えっと……………」

荒垣は言葉に詰まっている。

「……………やべっ……………」

荒垣は頭を抱える。

真田が小声で荒垣に近づいた。

「おい、なんかいつてやれよ…」

「やべえよ……………、なんも言つじとねえ……………」

「なんでもいいから、言つてやれよ……………シンジ」

荒垣と真田が小声で会話した。
だが、モロ順平に聞こえている。

「あっ、えーと、おめでとつ…」

と言つて、荒垣も順平に別れのメッセージを贈呈した。

順平は別れの握手をしようと、右手を荒垣に差し出したが普通に無視された。

荒垣は、やべえよ、本当になんにも言うことねえよ…と呟きながら、ソファアに座った。

最後に、真田が順平に花束を渡す。

そして、彼も別れのメッセージを言おうと口を開く…。

「えつと、伊織君…、卒業おめでとつ…。君と、僕は、長い付き合いで…、普段の生活でも、結構、遊んだりし、屋久島ではいろいろと、バカをやったりして…」

「くううー!!…うわあああんー!!…」

真田が語り始めると、順平は急に喚起余つて泣き始めた。

「君が居なくなるということ、その…、正直、悲しいといえ
ば………」

「うわあああん、真田さん!!…真田さん!!…」

順平は号泣した。

そして、真田は…。

「……悲しいといえば、『嘘』になりますが……」

『嘘』

あの日、見た空 茜色の空を
ねえ、君は覚えていますか？
約束、契り、初夏の風が包む
二人、寄り添った

無理な笑顔の裏
伸びた影をかくまう
だから、気づかぬふり、再生を選ぶ
テーブルの上の、震えない知らせ、待ち続けて
空白の夜も、来るはずのない朝も
全部、わかってたんだ

あの日、見た空 茜色の空を
ねえいつか思い出すでしょう
果たせなかった、約束を抱いて

二人、歩き出す

順平は硬直した。

涙が止まっている。

「えっと、おめでとう……」

と言って、真田も順平に別れのメッセージを贈呈した。

順平は別れの握手をしようと、右手を真田に差し出したが普通に無視された。

真田もソファアに座った。

「えっと、最後に順平さんから、ペルソナファンの皆さんへ向けて、最期のメッセージをお願いします」

と、アイギスは言って進行した。

そして、順平を花束を抱えてカメラの前に立つ。

目に涙をためて、彼はマイクに口を近づけ……。

CMのあと、伊織順平、最期のメッセージ……！

……

CMタイム

『ジュネスは、毎日がお客様感謝デー！来て、見て、触れてください！エブリデー、ヤングライフ、ジュ、ネ、スー！』

……

順平は、花束を抱えてカメラの前に立ち涙ながらに口を開く。

「みつ、みな、みな……」

順平の目からは大量の涙が溢れている。

「みなさん、見てください……こんな、こんないっぱいの花束……
こないっぱいの花束を誰がもらえらると思いま……、思いま、う
わああああああん……！！！」

とうとう、順平はこらえきれずに号泣してしまった。

「うわああああん……！！うわああああああん……！！！」

順平は花束を床に落として泣き崩れた。

それを見て、真田、荒垣、ハム子はもらい泣きしたのだろうか、
ソファアにうづくまる様な形で顔と口を隠して震えている。

アイギスはあくまで無表情だ。

そんな中、乾が立ち上がり……。

「順平さん……」

泣き崩れた順平の肩を叩いた。

すると、順平は泣きながら顔を上げた。

「うわああああああん……！！け、け、天田君……！！うわあああ
ああ……！！天田君、天田君……！！うわああああああん
ん……！！！」

と、順平は乾に泣きついた。

乾は雄々しく順平に胸を貸し、順平は乾の胸で大泣きした。しばらく、泣き止まない順平を宇宙人を捕らえた時のような感じで、真田と荒垣は作戦会議室の外に連れ出した。

こうして、伊織順平の卒業式は感動のまま終了した。

アイギス、ハム子、乾は改まってカメラの前に出た。

「えー、以上で、伊織順平さんの……」

アイギスが幕を引こうとした瞬間………。

「ちょっと、待ったあああああああ………!!!」

!?

どこからか、謎の声がした。

「順平君は、ペルソナ使いを……、やめへんで……! やめへんで……! やめへんで……! やめへんで……! ……」

すると……。

ドゥギヤーン……!

!?

なんと、いきなり作戦会議室の壁が爆発した。

アイギス、ハム子、乾は驚く。

そして、爆破された壁の向こうに居たのは………。

ゴゴゴゴゴゴ………。

………

CMタイム

『ジュネスは、毎日がお客様感謝デー！来て、見て、触れてください！エブリデー、ヤングライフ、ジュ、ネ、スー！』

.....

破壊された壁の向こうには、バニーガールの姿をしてギターを持つ順平と、嫌そうにギターを持つ真田、嫌そうにベースを持つ荒垣と、無表情でドラムの準備をしているチドリの姿があった。

アイギス、ハム子、乾の顔が固まった。

そして、順平は笑いながらマイクを握り……。

「ふはははは！驚いたかー？実はこれ、真田さん、荒垣さん、アイギス、ハム子に……、『天田君』に協力してもらって、俺の偽卒業式のドッキリしてもらったんだぜ！！みんな、驚いたかー？ふははははははは！！」

順平は白けた空気の中、高笑いをした。

そして、チドリはドラムを叩き始め、これを合図に、真田、荒垣も楽器の演奏を始めた。

.....

彼らが演奏している曲は、TVアニメ涼宮ハチの憂鬱の挿入歌
『God knows...』だ……。

順平は演奏に合わせて歌い始めた。

「だから、順平〜、ペルソナやめん〜、ペルソナを〜、使うのをやめ〜へん〜、ずっと〜、順平、ペルソナやめへん〜、順平〜、ペルソナ、やめ〜へん〜」

曲に合わせて、順平はサビの部分を変えて歌う。

アイギス、ハム子、乾はなにも言わずに帰った。

翌日…、順平の部屋に作戦会議室の壁の修理代、火薬の使用量、楽器のレンタル、耳鼻科での検査のための治療費、精神的苦痛による慰謝料の請求書が届いた。

……

以下、本編。

都内某ラーメン屋。

キタロー、グルメキング 1、友近 2の三人が山盛りにもやし
が盛られたラーメンを食べている。

1グルメキング：P3男性主人公編の月コミュの大食い少年。

2友近健二：P3男性主人公編の魔術師コミュの普通の同級生。

年上の女教師にだまされているのに、気づいてなく、女性主人公編
では岩崎理緒の想われているのに気づいていない。

キタローは黙々とラーメンを食べている。

グルメキングはハフハフ…と旨そうに食べている。

「うめえー」

友近は声を上げた。

キタローは隣に座る友近の頭を叩いた…。

「静かに食べる…」

「わりー、わりー」

3人はラーメンをひたすら食べていた。
完ッッッ!!!

キタロー、グルメキングとラーメン二郎に行く(後書き)

「元ネタ」ガキの使いやあらへんで!山崎ドッキリ卒業式」

モザイクカケロ（前書き）

今回と、次回の話の内容について一言…。とにかく、ごめんなさい…。

モザイクカケロ

昼間

……。。
夏休み前の屋久島、桐条家別荘のバカンスに来ていたはずの順平が波打ち際で体育座りをしている。

「……………」

彼は帽子に付いた砂を払いながら、遠い目で海を眺めた……………。
順平はガツクリした……………。
そして…。

「遭難しちまった」

順平は頭を抱える。

…数時間前…

「よし、みんなー！今日は私も泳ぐぞー！ふはははは！」

キタロー、ハム子、ゆかり、風花、順平、真田、アイギスのみんなが屋久島の海でビーチバレーをしていると、浮き輪を装備した水着の幾月 が現れた。

幾月修司：月光館学園理事長であり、メンバー達の顧問。しょうもないダジャレばかり言う。しょうもないシャレも、いい加減にしないシャレ。

かなり上機嫌だ。

「私、こう見えても泳げるんだ！スイミングスクールに通ってたからね…。スイミングなだけに…」

「スイスイと…」

ハム子がダジャレを言おうとした幾月を潰した。

「おいおい！ハム子君！横取りしないでくれよー！ふはははは！」

なにか良いことがあったのか、かなりハイテンションだ。

すると…、真田が…。

「そうだ…。今から、みんなでボートに乗ろうと思ってたんですが、幾月さんもどうです？」

と言って、何故か、海辺の近くにあったひよこボートに指を差した。

幾月は、いいねー、いいねーと乗り気だ。

こうして、みんなでひよこボートに乗ることになった。

みんな、ひよこボートの周りに集まる。

ひよこボートは4つあり、二人ずつでなら、ちょうど乗れる数だ。

ハム子はキタローに首を向けた。

「あなた、あたしと乗る？」

「どうでもいい…」

キタロー、ハム子がペアが組んで、ひよこボートの一つに乗った。それを見て順平はニヤニヤしながら、ゆかりに近付いた…。

「じゃあ、俺は、ゆかりっ……………」

「じゃあ、風花行くよー」

順平を無視して、ゆかりは風花の手を握って、ひよこボートに乗った。

ひよこボートに乗るゆかりと風花を、呆然と順平は見つめる…。

「……………」

「ドンマイ」

順平の肩を、真田は半笑いで叩いた。

嫌々ながらも順平は真田と二人で、ひよこボートに乗ることになった。

「じゃあ、僕はアイギスとだね……………」

「了解しました」

幾月とアイギスのペアで、残りのひよこボートに乗った。

みんなが海で、ひよこボートを漕いで遊んでいると……………なんの脈絡もなく、空にはゴロゴロ…………と妙な雲が浮かんできた。

そして、海も荒れはじめ……………。

一方、別荘の一室……………。

今日、美鶴は海に行かず、部屋で過ごしていた。

美鶴はせんべいを食べながら、テレビの天気予報を見ている。

『今日の昼から、屋久島では、ガルダイソ級の暴風雨が吹き、海が荒れると思われます！。危険ですので、外には出ないでください』

と、天気予報士が告げた。

それを聞いて、美鶴は窓に目を向ける。
雨が降り出した。

「みんな、大丈夫か……………」

堅焼きせんべいをかじりながら、美鶴は窓から暴風雨が吹いている海を眺めた。

そして……………。

現在の状況に至った。

順平は、ガルダイン級の暴風雨が去って晴れた空に向かって叫んだ。

「うがああああ！ここどこだよ！誰もいねえし、景色違うし、屋久島じゃねえよ、ここ！ひよこボート乗ってたら、さっきの暴風雨で無人島まで飛ばされちまったよ！！」

順平は、横に転がる残骸になったひよこボートを見つめた。
すると……………。

「はっ…！無人島…！！」

順平は、言葉の弾みで出た無人島という単語に今更ながらに背筋が凍った。

「……………」

今更になって、順平はビクビクガクガクと震え上がった。

「もし、無人島だったら……。どうすんだ……。ロボットは居るけど、猫型ロボットじゃねえから、助けに来ちゃくんな……。駄目だ！ネガティブなこと考えるな！俺！！」

と、順平は自分の顔を叩いた。

「……み、みんな……。は、大丈夫なんだろうか……」

順平は状況が状況なだけに、ネガティブな絶望的なことばかりが頭に過る。

そして、さつきから自分の横に転がるひよこボートの残骸に目を向けた。

さらに、順平の脳裏に嫌な想像が広がる。

順平は頭を抱えた。

「駄目だ！ネガティブになるな！俺！！こういうときこそ、冷静ならねえと駄目だろ！俺！！」

順平は気合いを入れた。

そして、暴風雨に流されなかつた帽子を脱いだ。

「……。そうだ。落ち着け……。俺……。キタローに差をつけられてるのは、こういう所で落ち着かねえからだ……」

順平は深呼吸をして、精神を落ち着かせる。

すると、さつきまで取り乱していたのがウソのように順平は冷静さを取り戻す。

とても、澄んだ気持ちになっていた。

順平は吹き抜ける風を肌で感じ、海の囁きに耳を澄ませた……。

「感じる……。ガイヤが俺に、もっと輝けと囁いている……………」

順平は澄み切った心で、穿いている海パンを脱いだ。
下半身にモザイクが掛かる。

順平は糸一つも纏わない、生まれのままの姿になった。
そして、海と草木の匂いを肺に貯えるように、大きく息を吸って吐く。

「なんて……………、気持ちがいいんだ……………」

順平はモザイクを揺らしながら、海辺を走り始めた……………。
今まで見せたことない穏やかな表情で、順平は海辺を走る。

「ウソみたいだ……………。こないだまで、影時間やタルタロスに囚われ、嫉妬や不安に駆られていた心がドンドン……………ほぐれていくのが解る……………。今まで、俺はなんてくだらないことで悩んでいた……………」

なんか悟り始めた。

「そうか……………、ここは無人島ではなく、地球の一部……………。地球の一部であり……………、俺……………、いや、僕は……………同じく、この地球……………、いや、宇宙の一部だったんだ……………」

壮大なスケールで、順平は悟り始めた。

波の飛沫と潮の薫りを肌に受け、足に受ける砂の感触と海の暖かさに感動を覚えた順平は、モザイクを揺らして走る。

そして、順平は立ち止まった。

「そつだ！ここは宇宙なん……………」

順平は数メートル隣で、同じく股間にモザイクが掛かっている幾月を見つけた。

幾月もなにかを叫ぼうとしている途中で、モザイクが掛かっている順平を見つけた。

……………。

順平と幾月は、砂浜に捨てた海パンを穿き直してモザイクを解除。

「……………」
「……………」

二人とも、気まずそうに互いの顔を見つめあう……………。
すると……………。

「伊織君……………」

「はい……………」

幾月の口が開いた。

「君……………今、なにか欲しいものある……………?」
「……………」

順平は帽子を被りながら……………。

「モザイクが欲しいっす……………。もう、全身隠せるぐらいの……………」
「そんなの、僕だつて欲しいよ……………」
「ジュネスに売ってないっすかね……………」
「売ってるわけじゃないか……………」

順平と幾月は、暗い顔で海辺を歩いた。

「伊織君……………誰にも言わないでくれないか……………」
「幾月さんも……………」

順平と幾月の絆がグツと深まった。
果たして、彼らの運命は如何に!?

……………

CMタイム

『ジュネスは、毎日がお客様感謝デー!来て、見て、触れてください!
い!エブリデー、ヤングライフ、ジュ、ネ、スー!』

……………

順平と幾月は、無人島内の森林地帯を歩いている。

「幾月さんが無事ってことは、一緒に乗ってたアイギスはどうしたんすか？」

「いや、気づいたときには、僕一人だったよ。君は真田君と一緒にだったよね？」

「いやー、俺も気づいたら、一人だったっす」

二人は、股間にモザイクが掛かっていた時の記憶にモザイクを掛けて森林を進む。

引き続き、二人は話をした。

「にしても、俺がこの辺に流れ着いたってことは、一緒に乗ってた真田さんも、この近くに居るんじゃないっすかねー」

「ああー、彼のことだ。きつと冷静に対処を……」

「いやー、わかんないっすよー。案外、真田さんも全裸になってたりしてー」

順平はニヤニヤしながら言う。

すると、幾月も眼鏡を光らせながら……。

「なるほど、彼も、案外、一人になると暴走しちゃうそうなタイプかもねー」

「でしょー、でしょー」

二人とも自分のことを棚にあげて、モザイク状態の真田の姿を想像して笑った。

すると、順平の脳裏にある絵が浮かんだ…。

「っ！？」

「どうしたんだ！！順平君！！」

幾月は驚いて、順平の顔を見た。
すると、順平の鼻から血が……。
これを見て、幾月がポカーン…となる。

「伊織君…、君、もしかして…」
「……………」

悟ったような顔をして鼻血を出す順平を、幾月は軽蔑の眼差しで見つめる…。

「女性陣で、なにかよからぬ想像したろ……………」
「はい…」

順平は鼻血を吹きながら頷いた。
すると、幾月は呆れたようにため息を吐いた。

「しょ、しょうがないじゃないっすか！！この話の流れなら、健全な男子なら……………」

弁解しようとする順平の肩を、幾月はポン！と叩いた。

「順平君…！」

幾月の表情が変わった。
そして…。

「……………実は、僕もだよ！」
「……………」

幾月は親指を立て、鼻血を流しながらスマイルした。
それを見て、順平は幾月に抱きついた。

「幾月さん!! あんた、男っす! 真の男っす!! カッコいいよ!!
兄貴って呼んでいいスカ!!」

「ははははは!! かまわんよ!! ははは!!」

二人は鼻血を流しながら、抱き合って喜んでいた。

すると…、二人の近くの草むららがガサガサ…と音を立て……。
そこから……。

「ん、なにか音がすると思ったら、幾月さんに順平じゃない……」

普通に海パン姿の真田が現れた。

……。

抱き合う二人を見て、真田は固まる。

とっさに幾月と順平は抱き合うのをやめ、鼻血を拭った。

何事もなかったように、幾月と順平は……。

「あつ、おっほん…。真田君、無事だったんだね…」

「無事だったんすね、真田先輩…」

「ああ…。ていうか、今、お前ら、抱き合ってたか…」

幾月と順平は、真田から顔を離すように振り返り……。

「よし、あとはキタロー君に、アイギス、ハム子君、岳羽君、山岸
君だな」

「そうっすね」

「いや、だから、お前ら、抱き合ってた…」

「はい、じゃあ、彼らを探しに、シュパッツ、シンコー!!」

「なしのおしんこー！ー！」
「だから、お前ら……」

幾月と順平は、早歩きで真田から離れた……。

……。
呆然としながら、真田は思った。

（あの二人……、まさか……）

脳裏には幾月と順平が抱き合う姿が思い出され……、真田の顔は青くなった。

「女に縁がないと、あーなるんだな……」

真田は苦い顔をした。

……

CMタイム

『ジュネスは、毎日がお客様感謝デー！来て、見て、触れてください！エブリデー、ヤングライフ、ジュ、ネ、スー！』

……

真田、順平、幾月の三人は海辺に戻った。

「とりあえず、この辺の森林を調べてみましたが、近くの岩場から飲めるような水が出ていたんで、飲み水の心配はありません。あと、

この辺、適当な果実がなっていたんで……」

冷静に状況を話す真田に、幾月と順平は苦い顔した。
すると、幾月は悔しそうな顔をして……。

「さ、真田君……」

「はい？」

「君、流れ着いてから、ずっと冷静にこの辺について調べてたんだ……」

「ええ……、取り乱して体力を消費するより、この周辺環境を把握して、生存のための……」

真田はあくまで冷静に状況を話した。
すると、幾月と順平は……。

「真田君……」

「真田先輩……」

「「ごめんね……………」」

「なにが!？」

ハモって謝った。

その二人のハモリは、取り乱してモザイク掛かった上、モザイクの真田を想像して笑い、女性陣でやましいことを考えていた二人と違い、冷静に状況と食料の確認をしていた真田に出来る精一杯の謝罪だった。

本当の男という物は、こんな風に出来る男のことを言うんだな
と、二人は思う。

すると……………。

「ん!？」

真田はなにかに気づいた。

「どうしたんすか？真田先輩？」

「あの岩の先から、人の声が聞こえないか？」

真田は大きな岩に指をさす。

その指の先に幾月と順平は目を向け、耳を澄ませると……。

……は、……………たー！おもい……………。
！？

確かに、岩の先から人の声が聞こえている。

それも叫んでいるような声だ。

「本当だ！」

「しかも、あの声、聞き覚えがあるぜ！」

幾月、順平の二人の耳にも声が聞こえた。

どうやら、3人の耳に聞き覚えのある声らしい。

真田、順平、幾月の3人は大急ぎで岩の方に向かう。

そして、声がある方に到着すると……………。

次回に続く！！

モザイクカケロ（後書き）

元ネタ「銀魂 遭難した回」

罪深き影のタルタロスに立ち向かう死神達に捧げる鎮魂歌

前回までのあらすじ。

モザイクカケラー、一つ、一つ、繋ぎ合わせて、描いて行くー
あなたがくれた出会いも別れもー

.....

「ん!？」

真田はなにかに気づいた。

「どうしたんすか？真田先輩？」

「あの岩の先から、人の声が聞こえないか？」

真田は大きな岩に指をさす。

その指の先に幾月と順平は目を向け、耳を澄ませると…。

…は、……………たー！おもい……………
!？

確かに、岩の先から人の声が聞こえている。

それも叫んでいるような声だ。

「本当だ!」

「しかも、あの声、聞き覚えがあるぜ!」

幾月、順平の二人の耳にも声が聞こえた。

どうやら、3人の耳に聞き覚えのある声らしい。

真田、順平、幾月の3人は大急ぎで岩の方に向かう。

そして、声がる方に到着すると……………。

「走り出したー！ー！ー、思いが、今でもおおー！ー！ー！！！！！！
この胸を確かに叩いてるからー！ー！！！！！！」

一人、海に向かって全力で歌っているハム子の姿が…。

……………。

彼女は『天元突破グレン ガン』の主題歌、『空色デイズ』をアカペラで全力で歌っている。

もはや、他人に見せられないレベルくらいに、彼女は腕を振り回して歌う。

かなり、テーションが上がっているようだ……。

……………。
真田、幾月、順平の3人は呆然とした。

「今日の僕があああー！その先に、つづ……………くつ……………
……………」

ハム子は、ふと視線を横にやると……………、そこには苦い顔をして呆然と立ち尽くす真田、順平、幾月の姿が……………。

……………。
……………。
……………。

「誰も居ないから……………、フルスロットルで歌ってました……………。
人に見られたら、もうタルタロスに一ヶ月引き籠もるくらいの勢いで歌ってました……………。」

ハム子は、涙でグシャグシャになった顔を手で隠して体育すわりをした。

そんな彼女の肩に、優しく順平と真田が手を置いた。

「きつ、気にするな……………。俺は、ロボアニメはガダムWしか知らないが、上手だったぞ……………。うん、上手だった……………」

「ああ……………、グンラガン、面白かったよな……………。ちなみに、好きなキヤラは誰？」

ハム子は顔を下に向けて泣きながら、ヨーコ……………と答えた。

真田と順平は口元を引き攣らせながら、必死に彼女のフォローをする。

すると、幾月がなにかに気づく……………。

「また、誰かの声が聞こえるね……」

幾月は森林の先に指をさした。

その指の先に真田と順平、涙を拭いて立ち上がったハム子は目を向けて耳を澄ませた……。

……ペン、………でみる………。

！？

確かに、森林の先から人の声が聞こえている。

それも、囁くようなひっそりした声だ。

「本当だ！」

「しかも、あの声……」

「風花だ！」

真田、順平、ハム子の3人の耳にも声が聞こえた。

どうやら、ハム子が言うに風花の声らしい。

真田、順平、幾月、ハム子の4人は大急ぎで森林の方に向かう。

そして、声がるる方に到着すると………。

「いつぺん、死んでみるう……………」

風花が一人で、TVアニメ『地獄少女』の閻魔あいのモノマネをしている……………」

風花は腕を組んで唸る。

「うーん、ちょっと似てないなー。もう少し、ドスを効かせた方がいいかなー」

風花は大きく息を吸った。

「いつぺんー、しんでーみ……………」

風花がふと視線を横にやると……………、そこには苦い顔をして呆然と立ち尽くす真田、順平、幾月、ハム子の姿が……………。

……………。
……………。
……………。

「誰も居ないから……………、フルスロットルで地獄少女の真似をしていました……………。人に見られたら、もうタルタロスに2ヶ月は引き籠もるくらいの勢いでやってました……………。ていうか、いつぺん、死にたいのは、あたしの方です……………。ごめんなさい……………。すみません……………。たまに、『オラクル』失敗して、全滅させて……………。ごめんなさい……………」

風花は顔を腕で隠して体育すわりをした。

そんな彼女の肩に、優しく順平と真田、ハム子が手を置いた。

「きつ、気にするな……。俺は、アニメは『ふしぎ遊戯』しか知らないが、上手だったぞ……。うん、上手だった……。オラクル不発していいように、セーブしてない俺らが悪いから気にするな……」

「真田さん、あんた、今いくつ……」

「あつ……。えつと、それにしても、上手だったよ、モノマネ……
……。本人かと思っちゃったよ……」

体育すわりで、ボソボソ……つぶやく風花を、真田、順平、ハム子の3人は口元を引き攣らせながら、必死にフォローする。

そんな中、幾月がなにかに気づく……。

「またまた、誰かの声が聞こえるね……」

幾月は海辺の先に指をさした。

その指の先に真田と順平、涙を拭いて立ち上がったハム子は目を向けて耳を澄ませた……。

……ヘイ！……ツ……。
！？

確かに、海辺の先から人の声が聞こえている。

今度のは、洋画劇場の吹き替えのような声が……例えると、クールなアメリカ人女性のような低い声だ。

「本当だ！」

「いつもより低めだけど、あの声は……」

「ゆかりだ！」

真田、順平、ハム子の3人の耳にも声が聞こえた。

どうやら、ハム子が言うにゆかりの声らしい。

真田、順平、幾月、ハム子の4人は、体育すわりで意気消沈した

風花を森林に残して、大急ぎで海辺の方に向かう。

そして、4人が海辺に到着すると……………。

ゆかりは口に木の枝をタバコのように啜え、大きな流木に座っていた。

すると、ゆかりは4人の気配に気づいてないのか、召喚器を本物の銃のようにクルクルを指で回しながら、独り言を言い始め……………。

注意：このあとのゆかりの台詞が、あまりにも規制に引つ掛かるような単語が多数だったのと、いくらファンフィクションとはいえ、あまりにもキャラ崩壊しすぎだったためにカットさせて戴きます。

……………。
……………。
……………。

「人に見られたら、もうタルタロスに一年間は引き籠もるくらいの勢いでやってみました……………」

顔を腕で隠すようにして、ゆかりは体育すわりをした。

ゆかりを囲むような形で真田、順平、ハム子、風花が呆然とした表情をしている…。

「あつ、あれはなかったぞ……………。いくらなんでも、あんな汚い言葉をバンバンと……………」

「俺、『フルメタルジャケット』って映画を思い出したぞ……………」

「……………さすがに、引いたよ…あれは……………」

体育すわりのゆかりを、真田、順平、ハム子の3人は顔の影を濃

くして責めた。

そんな中、幾月がなにかに気づく……。

「残りは、キタロー君とアイギスなんだが……………」

幾月は島の崖の方に指をさした。

みんなは、もうパターンがわかったのか、なんの疑問も抱かずに崖の方に向かった。

そこでは……………。

「見て見て、ジャック！鳥が飛んでるわ！」

アイギスはキタローのことを、『ジャック』と呼んで、崖の絶壁から鳥達を見た。

夕方になり、沈んで行く夕陽と茜色に染まった海。

それに映えるように、鳥達は翼を羽ばたかせて飛んでいる。

「そうだね…、ローズ……………」

「キレイー。鳥が、夕陽に吸い込まれて行くみたいー」

キタローはアイギスのことを、『ローズ』と呼び、彼女の後ろに立った。

二人とも、いつもの口調とはまったく違う口調になって、海に沈んで行く夕陽に感動している。

……。

すると、アイギスは海を見て、少しだけ目を潤ませた。

キタローは、それに気づき……。

「ローズ……？ ？ ？ どうしたんだい、海水が目染みたのかい？」

キタローは後ろから、アイギスの背中を抱きしめ、彼女の首筋に唇を置いた。

アイギスは、海面を滑るように飛ぶ鳥を見つめて……。

「違う、違うの、ジャック……」

アイギスは首を振った。

「わたしも……、あの鳥のように飛べたら……。そう、あの鳥のように、どこまでも……。遠くに飛べたら……」

アイギスは眼を潤ませ、キタローに呟く。

彼女の声は震えている……。

そんな彼女を愛おしく抱きしめながら、キタローは静かに、アイギスの首筋から耳元に唇を移動させ……。

「ローズ……。両手を広げてごらん……」

「えっ……」

「さあ、ほら、目を閉じて、両腕を広げてごらん」
「ジャック…？」

アイギスはキタローに言われるがまま、両腕を鳥の翼のように開いて目を閉じた……………。

……………。
しばらく、沈黙が走り…そして、キタローはアイギスの耳元で囁く。

「さあ、もういいよ、ローズ、目を開けて足元を見てごらん…」
「…！」

アイギスは首を下に向け、目を開く…。

すると、そこには、夕暮れに染まった茜色の海が広がっていた。崖のギリギリまで近づき、両腕を広げ、まるで自分が空を飛んでいるようにアイギスの視界には海が広がる。

彼女は感動した。

「ジャック！わたし、飛んでる！わたし、空を飛んでいるわ！！鳥のように、飛んでるわ！」

アイギスは感動しながら、無邪気に足元に広がる海を見つめた。

「綺麗…」

アイギスは足元のキラキラ…と光り輝く紅の海を見つめ、唇から何度も何度も、綺麗…の一言を繰り返す。

海と同じように、キラキラ…と目を輝かすアイギスの横顔を愛おしく見つめながら、キタローは彼女の身体をより強く抱きしめた…。

そして、彼は彼女の頬に唇を近づけ…。

海を見つめる彼女の唇は静かに開いた。

「走り出したー、思いが、今でもー この胸を確かにー叩いてるか
らー」

アイギスはムードぶち壊して、『空色デイズ』を歌い始めた。
キタローは、アイギスから腕を離して転倒。
そして、再び立ち上がり…。

「なんで、そこで、グレンラガンの主題歌を歌うんだよ!! こういう
場面では、『タイタニック』の主題歌か、せめて、『鳥の詩』を
歌えよ!!」

キタローは頭を掻きながら、アイギスにキレた。

「まったく!!」

「すみません…。」じつじつシーンでは、どうすべきか……………」

キタロー、アイギスはジャックとローズをやめ、いつもの口調に戻っている…。

「どうやら、先ほどからのタイタニックごっこは終了したようだ…。」

「まったく、せつかくムード良く、タイタニックごっこしてたのに、このタイミングでグレンラガンとか理解できないよ!！」

キタローが、そう言つと…。

「理解出来ないのは、貴様だあああああ—————!!!」
「!!!!!!!」

ドゴオオオオオーン!!!!!!

いきなり現れたハム子が、キタローにライダーキックをした。

「石田彰は、レオナルド・デイカプリオの役が多いつ!！」

と叫び、キタローは吹っ飛んで崖から落ちて行つた。

ライダーキックしたハム子の後ろには、なんと表現していいか解らない表情の真田、順平、幾月の顔が…。

はぁーと、仮面ライダーアギトのように構えを解いて呼吸を落ちてかせながら、ハム子は顔を真っ赤にし、崖から落ちたキタローに向かって叫ぶ。

「あ、あ、あんた!！アイギスになにしてたのよ!！しかも、なにイマドキ、タイタニックごっこしてんのよ!！」

「どうやら、タイタニックごっここの一部始終を、彼女らに見られていたようだ。」

「うるせーなー。海といえば、タイタニックごっこだろー」

キタローは自力で崖から這い上がった。無傷ですると…。

「ハッ…」

ゴコゴコゴコゴコゴコ……………。

キタローは、強烈な怒りのオーラを近くに感じた。

ゴコゴコゴコゴコゴコ……………。

ゴコゴコゴコゴコゴコ……………。

ゴコゴコゴコゴコゴコ……………。

ゴコゴコゴコゴコゴコ……………。

恐る恐るキタローは、その怒りのオーラを感じる方向に首を向ける…。

その先には……………。

笑顔で、頭に召喚器を構えるゆかりと風花の姿が……………。

キタローは固まった。

ハム子、真田、順平、幾月、アイギスは巻き添えを食らわないように、全力でその場から逃げた。

硬直したキタローの前に、ゆかりと風花が笑顔で立ち塞がる。

笑顔で血管を浮かせるゆかりの隣で、静かに風花の口が開く……………。

「いっぺん、死んでみるう…?」

キタローの断末魔は、屋久島すべてに響き渡った。

夜

桐条別荘の玄関前。

ハム子、真田、順平、ゆかり、風花、幾月、アイギスに…、ボロボロになったキタローが到着した。

「遅かったな…」

美鶴が出迎えてくれた。

無人島だと思っていた、あの島……………実は…屋久島の反対側だった……………。

前日のアイギスの件（ゲーム本編参照）があったので、風花が念

のために持っていた召喚器でペルソナ、ルキアを呼び、それで別荘まで辿り着いた。

「風花が居なかったら、やばかったっすね……」

「まったくだ……」

順平、真田はぐったりした。

そんな二人の様子を見て、美鶴は……。

「どうした？まさか、遭難でもしたか？」

と、微笑みながら言つと……。

「いやー、実は、そーおーなん………」

幾月が、なにか言おうとした瞬間。

順平、真田、ゆかり、ハム子、風花の眼が光った。

「総攻撃チャー……、ンス……」

ギャンー!!

ゆかりの言葉を合図に、順平、真田、ゆかり、ハム子が幾月に飛び掛かり、ドカバキ！ドカバキ！！と音を立てた。

幾月の断末魔が屋久島中に響く……。

それを見て、美鶴はボロボロになったギターに近づき……。

「本当に、なにがあつた？」

頭に？マークを連発する美鶴に、ギターは……。

「どつでもいい…」

と言って、スタスタ…と部屋に向かって行った。

深夜

みんなが寝静まった夜。

「…」

アイギスは、自分の部屋でキタローに抱きつかれた時の事を思い出す。

キタローが自分の背中を抱きしめた時の感触を思い出すと、彼女の顔は赤くなり、心臓部が妙な音を立てる。

そんな自分の状態を、アイギスは疑問に思った。

「思考回路…、いや、精神回路に異常あり…。原因は不明…。何故？」

と独り言を言いながら、アイギスは自分の首筋を撫でた。

昼食と晩食の間に存在する……おやつ時間……

深夜 影時間

キタローは、いつも通りにベッドで眠っていると……。

……！

何者かの気配した。

目を開けて、横を見ると……。

「やあ、こんばんは……」

ファルロス が現れた。

ファルロス：P3主人公（キタロー、ハム子）が寮で一番最初に出会った謎の少年。それ以来、深夜の影時間に、たびたび主人公の前に意味深な『終わり』を告げに現れる。

キタローは……。

「今日は、なんだ……？満月はクリアしたぞ……。寝かせてくれ……」

と、うんざりしながら毛布を被る……。

「もうー、冷たくしないで……。さっき、タンスのパンツを畳んで整理してあげたのに……」

ファルロスがそう言うと、キタローは顔を青くして布団から起き上がった。

「ダメだよ……、ちゃんと畳んでしまわないとー。ほら、ワイシャツもシワになってるし……。こないだ、アイロン掛けてあげたばかり

なのにー」

と言いながら、ファルロスにはキタローの服にアイロンを掛け始めた。

どおりで、なにもしなくても部屋が綺麗なわけだ……とキタローはファルロスを見つめた。

翌日

深夜 影時間

キタローは、いつも通りにベッドで眠っている……。

……！

何者かの気配した。

「やあ、こんばんは……」

また、ファルロスが現れた。
キタローは……。

「今日は、なんだ……？」

と、うんざりしながら毛布を被る。
すると……。

「戸棚におやつ入れておいたからね」

ファルロスがそう言って、部屋から消えた……。

「……………」

キタローはベッドから立ち上がり、部屋の戸棚を見た。
……………。
コアラのマーチ（冬限定、メープルシロップ）が入っている。
キタローは蓋を開け、バリポリ…と食べる。

「うまつ…」

上品なメープルシロップが薫り、程好い甘さが口に広がった。

翌日

深夜 影時間

キタローは、いつも通りにベッドで眠っていると……………。

……………！

何者かの気配した。

目を開けて、横を見ると……………。

「やあ、こんばんは……………」

またまた、ファルロスが現れた。

キタローは……………。

「今日は、なんだ……………？」

と、うんざりしながら毛布を被る。

すると……………。

「ちゃんと野菜も食べなきゃダメだよ」

ファルロスがそう言って、部屋から消えた……………。

翌日

深夜 影時間

キタローは、いつも通りにベッドで眠っていると……………。

……………！

何者かの気配した。

目を開けて、横を見ると……………。

「やあ、こんばんは……………」

またまたまた、ファルロスが現れた。

キタローは……………。

「今日は、なんだ……………？」

と、うんざりしながら毛布を被る。

すると、ファルロスは懐から手編みの手袋を出した。

……………。

手袋には『P3』のロゴが……………。

たぶん、ファルロスが手編みで作った手袋だ。

「風邪、引いちゃダメだよ」

ファルロスがそう言って、部屋から消えた。

キタローはベッドから立ち上がり、手袋を手に装備した。

……………。

「温い……」

手にファルロスの温もりを感じた

翌日

深夜 影時間

……。

……。

今日は来なかった。

朝

キタローは起き上がり、歯を磨こうと洗面所に向かう。

ふと、自分の机に目をやると……。

「……!!」

部屋のベッドの下に隠してたモザイク本が綺麗に整理されて、机に置かれていた……。

キタローは頭を抱える。

なんで、わかった……と疑問に思いつつ、またベッドに戻した。

……

ハーフタイム

『ハム子の場合』

深夜 影時間

ハム子は、いつも通りにベッドで眠っているよ……。

……！

何者かの気配した。

目を開けて、横を見ると……。

「やあ、こんばんは……」

ファルロスが現れた。

ハム子は……。

「今日は、なに……？ 満月はクリアしたよ……。寝かせてよ……」

と、うんざりしながら毛布を被る……。

「もうー、冷たくしないでよ……。さっき、君のダンスにあったパンツを畳んであげ……」

ファルロスがそう言うと、ハム子は布団から起き上がって枕を投げた。

避けられた。

俺が…、番長だ…！

2011年某月某日（日） 晴れ

昼間

八十稲羽駅前に、一人の男の姿があった。

その男はサングラスを外して、街を見つめる。

「まったく、寂れた街ねー」

「そうですねー」

あなたの、テレビに時価ネットたなかー みんなの欲の友ー

我らが、時価ネットたなかに田中社長 である。

田中社長：P3悪魔コミュの男性。時価ネットたなかの社長。毎週日曜の通販番組で、誰が使うんだよ的な謎の商品を販売している。美少年に目がないらしい。余談だが、作者が『たかだ社長』と素で間違った回数が数え切れない。

彼の背後にはカメラマンなどの、テレビ関係の人間が居た。

どうやら、テレビ番組の収録らしい。

番組のタイトルは『田舎に泊まりやがれ!!』。その名の通り、芸能人が民家に泊まり、そこに住む人々と交流するという番組内容。お茶の間に人気の番組である。

田中社長とカメラマンは、ため息を吐きながら街中を見つめる。

「いやあー、本当ー。辰巳ポートアイランドと比べると、申し訳ないくらいに寂れてるわねー。しかも、最近、物騒だしー」

「そうっすねー。さっさと、どこかに泊めてもらって、パパッと収録を終わらせて、明日は天城屋旅館の温泉にでもー」

「えー、あそこ最近、物騒な殺人事件あったんでしょー。行きたく

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ……。

番長ですが？なにか？と少年は言う。

そう、この少年こそが誰でもない自分こと、ペルソナ4主人公……番長である。

まさに番長！！

自分は腕を組んで、目の前に現れた田中社長を威圧する。

「きつ、君……あたし、を誰だか知ってるかしら？」

田中社長は恐る恐る聞いた。

自分は、知りません……ッ！！の一言で済ませ、学ランの懐から美味棒（サラミ味）を取り出して食べる。

まさに、番長！！

田中社長はビビッて、カメラマンを引き連れ電柱に隠れた。

「ちょっと、なんなのあの子！！このあたしを知らないどころか、威圧するなんて！！しかも、見た！？美味い棒よ！美味い棒！！あたし、コーンポタージュが好きなのに！！」
「落ち着いてください！！」

二人は電柱の影でひそひそ話をした。

「数年前に、キタローとか、ハム子とかいう奴らに出会った以来の衝撃よ……」

「ああ……聞いてます……。ドケチの社長に、恵まれない子ども達に募金させるように考えを直させた存在と……」

「ドケチは余計よ！」

田中社長は昔の記憶を思い出しながら、美味い棒をシャクシャク食べる自分を見つめる。

「だからこそ、社長！あんな襟立ての美味い棒少年に負けてなりません！！」

「そうね…。ふふつ、見てなさい…。このジャパニーズドリームを掴んで成り上がった、この私がガクン！と泊めさせてもらってくるわ！！」

社長はカメラマンに讃えられながら、電柱から出た。

そして、再び、自分にお泊り交渉を。

また、あなたですか？と言いなながら、自分は美味い棒二本目を食べ始めた。

「あつ、あのね、私は、ほら、日曜朝の…」

社長の言葉に、自分はビクツと来た。

もしかして！！あなたは！！と叫んだ。

（ふふつ。チョロイわね…。どうやら、このあたしのことを思い出したようね…）

社長は微笑む。

仮面ライダーに出てた人？と自分は美味い棒を食べながら聞いた。

社長はガクン！と来た。

「違うわよ…」

じゃあ、戦隊物に出てる人？と自分は美味い棒を食べながら聞いた。

社長は、またガクン！と来た。

「違つわよ…」

じゃあ、プリキユア？と自分は美味しい棒を食べながら聞いた。
社長はガツクリ来た。

「違つわよ！遠ざかつてるわよ！！」

社長は青筋を浮かべた。

じゃあ、もうわっかんねえよ…と自分は青筋を浮かべて逆ギレる。
バツタン！！

社長は転倒した。

日曜はドラゴンボール改が終わると終わるだ…と、自分は美味しい棒3本目を食べながら言った。

まさに番長！！

「あんだ、どんな寂しい日曜過ごしてんのよ！！せめて、サエさん見てから日曜を終えなさいよ！！」

田中社長はキレながら、カメラマンの居る電柱に戻った。

「ちょっと、なんなのあのガキ！！このあたしを知らないどころか、侮辱するなんて！！しかも、聞いた！？ドラゴンボールよ！ドラゴンボール！？あたし、セルはさっさと始末すべきだったと思ってるのに！！」

「落ち着いてください！！」

二人は電柱の影でひそひそ話をした。

その間、自分は美味しい棒4本目を食べている。

「社長！あんな少年に気圧されてどうするんです！！普段、ボロボ

口のスイエットで過ごしてるあなたらしくもない!!」

「なんで知ってるのよ!!」

ク。
プライベートに触れられた社長は、カメラマンの腕をアームロツク。

「うぎゃああああ!!!!」

カメラマンは、手に持っていたカメラを地面に落として伸びた。

社長はカメラマンを気絶させ、電柱から出た。

そして、また再び、自分にお泊り交渉を。

なんです、また、あなたですか?と問いながら、自分はまるごとバナナを食べ始めた。

「あつ、あのね、私は、ほら、日曜朝の…通販やってる…」

社長の言葉に、自分はビクッと来た。

ああ、もしかして、時価ネットたなかの社長!?!と叫んだ。
やっと、伝わったようだ。

「そうよー、そうよー」

社長はホツとした。

すると、自分は…最初っから、そう言えよ…と笑顔で言い放つ。

まさに番長!!

カチン…!と、社長の中の何かがキレた。

自分は、モゴモゴ…とまるごとバナナを食べ終えた。

「うぎゃああああ!!!!」

巽家の茶の間では、絆創膏だらけの田中社長と完二に、完二の母、カメラマン、そして、自分の5人が夕飯を囲っていた。どうやら、殴り合いの末に友情が芽生えたのか、社長は完二の家に泊めてもらうことに成功。

楽しそうに会話をしながら、夕飯を御馳走になっている。そして、さりげなく自分も夕食を御馳走になる。まさに番長!!

「まったく、この子は、本当は寂しがりでねー」

「つちよ！余計なこと言うなよ!!」

「あはははは!!完二ったら、情けないわねー!!」

「っせーな!!」

完二と母の会話を聞いて、田中社長は楽しそうに笑う。こうして、田中社長の八十稲羽での夜は笑い声で過ぎた。

翌日の朝（月）晴れ
朝

「じゃあねー、楽しかったわー」

「おう、また来いよー!!」

社長とカメラマンは、完二と完二の母に大きく手を振って去って行った。

満足げな顔をして、社長とカメラマンは駅に向かって商店街を歩く。

「ふふふ、社長。なんだかんだ言って、結構、楽しんでましたねー」

「うっさいわねー」

社長は照れながら歩く。

そして、駅前に到着すると……。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……。

「ハッ！」

自分が居た。

社長とカメラマンは身構える。

だが……。

自分は黙って、二人の手に美味しい棒（サラミ味）を渡した。

「……！」

田中社長は驚く。

そのまま、自分はなにも言わずに去る。

まさに番長……！！

社長とカメラマンは去って行く自分の背中を見つめた。

……。

一呼吸を置いてから、社長は美味しい棒を食べ始めた。

「ふん……。八十稲羽の番長ね……」

田中社長は微笑みながら、シャクシャク！と美味しい棒を食べる。

「サラミ味も悪くないわね……」

清々しく笑いながら、社長は八十稲羽は後にした。

こうして、田中社長は収録を終えた…。

だが…………。

このときの田中社長、カメラマンの二人は気づいていなかった。

田中社長がカメラマンにアームロックしたとき…、カメラマンはカメラを地面に落として壊してしまい、まったく映像が撮れていなかったことに…………。

それにより、この八十稲羽の収録が放送されることはなかった…。しかし、だとしても、田中社長は満足げな表情だったそうで…。

数日後（日）雨

朝

あなたの、テレビに時価ネットたなかー みんなの欲の友ー

日曜の朝、通販番組にチャンネルを合わせた。

テレビには田中社長が映っている。

「はい、今日のオススメはこれ！『美味い棒サラミ味1年分』！」

自分はリモコンを落とした。

…………

ハーフタイム

『ユキちゃんのパーフェクトさんすう教室』

歌：天城雪子 feat. クマクマ

「みんなー、ユキちゃんのさんすう教室始まるクマよー！ユキちゃんみたい、平均点以上目指して頑張るクマねー」

「ジュネスからバスが出てー、初めにリーダー乗りましたー」

四目内書房でリーダー降りて、イザナギ、ジライヤ乗りましたー
りせちゃんちで、イザナギ降りて、結局、結局、結局、合計何人

だ！？

答えは、答えは、答えは、0人！！0人！！

何故なら、何故なら、それは！？」

雪子が、普通に歌を歌っていると…。

ガタン！と戸を開いて自分が現れた。

「…」

雪子が自分に向かって歩き出した。

そして、なにも言わず、自分の顔に鼻眼鏡を付けさせた。

「似合う…！！」

雪子は笑った。

完ツツツ！！

くっ、目にペルソナが…！

2011年某月某日（日） 晴れ

昼間

八十稲羽市ジュネス屋上。

本日は、ここでは記者会見が行われた。カメラを前に、陽介、千枝、一条、長瀬、りせ、直斗、雪子、完二、クマ、自分が横一列の席に座っている。

多くの花束と会場のゲスト、記者に囲まれながら、陽介はマイクを握る。

そして、カメラは陽介に向けられた。

「どーも、主役を演じさせてもらいます、ジュネスの息子、花村陽介役の花村陽介です」

と言つて、陽介は挨拶した。

パシャパシャ！と、フラッシュが次々と光る。

「えー。今回、恋愛物というジャンルの主人公かつ、里中千枝さんとのラブコメ展開を演じさせてもらい、正直、緊張しています、はっ…」

と陽介は、はにかんだ笑顔をした。

それが会場の笑いを誘う。

「では、皆さん、よろしくお願いしますー」

と言つて、陽介はペコリと頭を下げた。盛大な拍手が巻き起こる。

そして、陽介はマイクを隣の千枝に渡す。
千枝がマイクを握ると、カメラは千枝に向けられた。

「どーも、ヒロイン役で、今回、花村君のお相手役をさせて頂きま
す、里中千枝役の里中千枝です」

と言って、千枝は挨拶した。

パシャパシャ！と、フラッシュが次々と光る。

「えー。今回、恋愛物のヒロイン役ということ……いやーっ、本
当に緊張していますー。ははっー、花村君共々、緊張しとりますがな
ー、ははっー」

と千枝は軽快なトークをし、会場の笑いを誘う。

「それでは、皆さん、よろしくお願いしますー」

と言って、千枝はペコリと頭を下げた。盛大な拍手が巻き起こる。
そして、千枝はマイクを隣の一条に渡す。

一条がマイクを握ると、カメラは一条に向けられた。

「どーも、花村君と里中さんの仲を引き裂くライバルの神奈川県綾
南高校2年のディフェンス役を演じさせてもらいます、一条康です」

と言って、一条は挨拶した。

パシャパシャ！と、フラッシュが次々と光る。

「えー。よくある恋愛もののライバル、憎まれ役ということで、頑
張っていきましょうー」

と、一条は隣の千枝をチラ見して笑う。

「それでは、皆さん、よろしくお願いしますー」

と言って、一条はペコリと頭を下げた。盛大な拍手が巻き起こる。そして、一条はマイクを隣の長瀬に渡す。

長瀬がマイクを握ると、カメラは長瀬に向けられた。

「どーも、花村君と里中さんの仲を引き裂くライバルの神奈川県綾南高校2年のディフェンス役の一条君の隣の家に住んでる人が飼ってる猫の本当の飼い主役の長瀬大輔です」

と言って、長瀬は挨拶した。

パシャパシャ！と、フラッシュが次々と光る。

「えー。今回、花村君と里中さんの仲を引き裂くライバルの神奈川県綾南高校2年のディフェンス役の一条君の隣の家に住んでる人が飼ってる猫の本当の飼い主という複雑な役なので……役作りに苦労しましたが、いざ、演じてると自分に通じるものがあったって演じて楽しかったです」

と長瀬が言うと、会場のゲストは拍手をした。

「それでは、皆さん、よろしくお願いしますー」

と言って、長瀬はペコリと頭を下げた。更に盛大な拍手が巻き起こる。

そして、長瀬はマイクを隣のりせに渡す。

りせがマイクを握ると、カメラはりせに向けられた。

「どーも、通りすがりのルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの真似をしている逢坂大河役の久慈川りせこと、りせちゃんですー！」

と言って、りせは得意の小悪魔風挨拶をした。

パシャパシャ！と、フラッシュユが次々と光り、会場はドツと沸く。

「それでは、皆さん、よろしく願いしますー」

と言って、りせはペコリと頭を下げた。更に盛大な拍手が巻き起こる。

そして、りせはマイクを隣の直斗に渡す。

直斗がマイクを握ると、カメラは直斗に向けられた。

「どーも、キャプテンウルトラ役の白鐘直斗です…」

と言って、直斗は慣れていないのか顔を赤くして記者陣に挨拶をした。

パシャパシャ！と、フラッシュユが次々と光る。

「それでは、皆さん、よろしく願いします…」

と言って、直斗は顔を伏せ、ペコリと頭を下げた。更に盛大な拍手が巻き起こる。

そして、直斗はマイクを隣の雪子に渡す。

雪子がマイクを握ると、カメラは雪子に向けられた。

「ど、どーも…、タツコングにビンタする役の天城雪子です…」

と言って、雪子は緊張気味に挨拶をした。

パシャパシャ！と、フラッシュが次々と光る。

雪子はペコリと頭を下げた。更に盛大な拍手が巻き起こる。そして、雪子はマイクを隣の完二に渡す。

完二がマイクを握ると、カメラは完二に向けられた。

「そして…、それを止める役の巽完二です……」

完二は顔の影を濃くして挨拶をした。

パシャパシャ！と、フラッシュが次々と光る。

完二はペコリと頭を下げた。更に盛大な拍手が巻き起こる。そして、完二はマイクを隣のクマに渡す。

クマがマイクを握ると、カメラはクマに向けられた。

「ウホホーイー！」

クマはハイテンションで喜んでいる。

そして……。

「特に、なにもしませんでした。熊田です、クマ」

と、クマが言った。

会場の空気が急速冷凍された。

「それでは、皆さん、よろしくお願いだクマー」

と言って、クマはペコリと頭を下げた。乾き切った拍手が巻き起こる。

そして、クマはマイクを隣の自分に渡す。

自分がマイクを握ると、会場が大きく騒ぎ出す。パシャパシャ！と、フラッシュが次々と光る。

マイクを握って、自分は挨拶を始めた。

ガンダムエクシア役の番長です……………。

この自分の挨拶に盛大な拍手が巻き起こる。

パシャパシャ！と、フラッシュの数が増えた。

さらに、自分は…えー、今回、愛読書が『きまぐれオレンジロード』のシャドーボクシングが日課の思春期のガンダムエクスシアの役と言うことで、身体を引き締めるため、テレビの中の完二のダンジョンで汗を流し、5キロの減量に成功しました…なお、甘いものは太るけど、我慢せずに甘いものを食べました。今回、ガンダムエクスシアが『ルージュになりたい』を歌うシーンのボイスアクターを一生懸命に演じたので、よろしくお願いします…と挨拶した。

パチパチ！と盛大な拍手が響く。

改めて、全員が立ち上がって、記者や会場のゲストに挨拶をした。こうして、記者会見を無事に終了した。

みんなは盛大な熱気を受け、会場から控え室に移動した…。
全員が控え室の椅子に座る。

そして……。

「ぶっちゃけ、俺ら、なにすんの…」

陽介の問いに、千枝は…さあ……としか答えられなかった。

……

CMタイム

『ジュネスは、毎日がお客様感謝デー！来て、見て、触れてください！エブリデー、ヤングライフ、ジュ、ネ、スー！』

……

ネタの内容からお蔵入りにするか本気で悩んだけど、この際、出してみようと思うシリーズ。

『ガチムチペルソナレスリング』

「最近、だらしないぞ！順平！！」

「ノー！ノー！！」

真田は順平の海パンを掴み……………。

注意：このあとの展開、描写が、あまりにも規制に引っ掛かるような単語が多数だったのと、いくらファンフィクションとはいえ、あまりにもキャラ崩壊しすぎだったためにカットさせて戴きます。

……………

CMタイム

『ジュネスは、毎日がお客様感謝デー！来て、見て、触れてください！エブリデー、ヤングライフ、ジュ、ネ、スー！』

……………

ハーフタイム

『会長のパーフェクトさんすう教室』

歌：桐条美鶴 feat. テオドア

テオドア：PPP女性主人公編にのみ登場するベルベットルームの住人の男性。マーガレット、エリザベスの弟。クエストにてドッ

グフードを渡すと、彼の悲惨な過去が聞ける。

「みなさん…、美鶴さんのさんすう教室始まります…。美鶴さんのように、平均点以上目指して頑張って下さいね……」

「巖戸からモノレールが出てー、初めにキタロー乗りましたー
ポートアイランドでキタロー降りて、オルフェウス、タナトス乗りましたー」

学園で、タナトス降りて、結局、結局、結局、合計何人だ!?

答えは、答えは、答えは、1人!!1人!!

何故なら、何故なら、それは!?!」

「当たり前だろ……」

完ツツツ!!

くっ、目にペルソナが…！（後書き）

元ネタ、「ごつつええ感じ 記者会見」、「ガチムチパンツレスリ
ング」、「チルノのパーフエクトさんすう教室」

ブルーになりたい果実共が織り成す鎮魂歌

放課後

キタロー、ハム子、ゆかり、風花の二年生組が磐戸の商店街を歩く。みんなは、どこで夕食を済ますかと会話をしているが、なかなか決まりそうにない。

すると、風花の足が止まった。

「あつ、あそこに、おすし屋さんが出来たんだ？」

風花が指をさした先には、『カカロット寿司』と書かれた看板が。みんなの足が、ここで止まった。

どうやら、最近、開店したチエーン店の回転すし屋のようだ。

開店したばかりの回転すし（ダジャレじゃない）ということ、ゆかり、風花は興味津津。ハム子はキタローに、ここにする？と聞いたが、どうでもいい…と返されたので、ここで夕食を食べるということに決定した。

ガラガラと、キタローは店の戸を開けた。

……………。

入ってみると、人っ子一人居ないどころか、店員も居ない。ただ、店内では寿司の皿がチエーンコンベアの上を循環している。

「あれ、まだ開店してないのかな？」

と風花が不安げに言った。

ハム子は店前を見に行つたが、『営業中』と立て札はある。

「営業はしてるみたいだよ…」

「えっ、でも、誰もいないし」

ゆかりは改めて周囲を確認したが、やはり、誰もいない。
すると…。

「どうでもいい…」

キタローは、お構いなくカウンター席に着いた。

……。
みんな戸惑ったが、話が進まないのので席に座ることにした。

「まつ、まあ、ちゃんとお金払えばいいことだし…」

「うっ、うん」

「そうね…」

風花、ゆかり、ハム子は苦笑いでカウンター席に座る。
みんな、おしぼりで手を拭き、食べる準備をした。

「じゃあ、いただきますー！」

とハム子は言い、流れてきたかんぴょう巻きを取った。

「おっと、じゃあ、あたしもー」

ゆかりも流れてきたかんぴょう巻きを取った。

「あつ、あたしもー！」

風花も流れてきたかんぴょう巻きを取った。

「……………」

キタローもかんぴょう巻きを取った
全員、かんぴょう巻きを取った。

それを見て、風花は笑う。

「はは、みんな、かんぴょう巻きー」

「本当だー！」

ゆかりも笑った。

「ははは、これじゃ、かんぴょう巻き食べに来たみたいじゃないー」

と、ハム子はチェーンコンベアの方に目をやった。

かんぴょう巻きしか、流れてこなかった。

「ぶざけるなああああー！ー！ー！ー！ー！ー！」

キタローは召喚器を取り出して叫んだ。

パアアアアーン！ー！ー！

キタローは頭に召喚器を当て、タナトスを召喚。目を光らせ、調理場の方に向かった。

「女将を呼べえええー！ー！ー！ー！ー！」

タナトスに剣を構えさせながら、キタローは調理場で叫んだ。
すると、そこには…。

「あつ、キタローー！！！」

アルバイトの制服を着た順平の姿が…。

………

CMタイム

『ジュネスは、毎日がお客様感謝デー！来て、見て、触れてください』

い！エブリデー、ヤングライフ、ジユ、ネ、スー！」

.....

ハム子、ゆかり、風花も調理場に集まった。そして、順平がここに居る理由と、かんぴょう巻きしか流れてこない理由を聞いた。

「開店したばかりのここで、今日からバイト始めたんだが……。店長が嫌な奴で……。社員のみんながスト起こして、みんなお手上げ侍しちまって、店長もキレてどっか行っちゃまって、店員がバイトの俺しか居なくなり、お手上げ侍なわけよ……」

順平はゲツソリした顔で話す。

なんとも気の毒な話である。

「なるほど、それで店員は順平だけで、かんぴょう巻きしか握れなくて、お手上げ侍なわけ……。どーりで、お客がお手上げ侍なわけだ……」

ハム子は、なるほど……。なるほど……。頷く。

ゆかりも頷く。

そんな中、風花は……。

（なんで、かんぴょう巻きが握れるなら、かつぱ巻きとか、鉄火巻きがお手上げ侍なわけ……）

と、言いたいが堪える。

すると、ゆかりは……。

「ていうか、これ、明らかに店長と社員の問題じゃん！バイトの順

平は、別ににも悪くないわけだし、なにも律儀にバイトすること
ないじゃん!!」

と正論を言った。

だが…。

順平の顔の影が濃くなった。

これを見て、ゆかりの勢いが止まる。

順平は帽子を深く被り直し……そして、重々しく、口を開いた。

「いやっ、その…実は、今、緊急で金が必要だよ……」

!?

この言葉に、ハム子はハツとなった。

ハム子は、ゆかりと風花の耳元に小声で話しかけた。

(お金が必要って、もしかして、チドリさんのことで必要なんじゃないか…)

(あっ!)

(えっ!)

ハム子の言葉に、ゆかり、風花は衝撃を受ける。

(そっか、順平君…。チドリさんのために…)

(あたし、なんて無神経なこと言っちゃったんだろ…)

風花は表情を暗くした。ゆかりは、さっきの自分の発言を反省した。

ハム子、ゆかり、風花がチドリのためにバイトを頑張っていると
思われる順平の姿に感動した。

だが、その頃、順平の脳内…。

(まだ、ゲーム屋に、DSiLL残ってるよな……)

違った。

すると、ハム子は握り拳を振り上げた。

「よし、わかったわ!!あたし達も手伝ったげる!!」

!!

ハム子の言葉に、順平はビックリした。

「えっ!いいのかよ!!バイト代は、俺の分しか出ないぜ!」

「いいよ、別に」

「うん、あたし達も順平君の手伝いするよ」

ゆかりと風花も前に出た。

「みつ、みんな…」

順平は目に涙を浮かべる。

そんな中、どうでもいい…と呟きながら、調理場からギターは去ろうと背を向けた。

ハム子は召喚器を頭に構えた。

パアアアーン!!!

逃げようとするギターの襟首を召喚したオルフェウスで掴みながら、ハム子は腕を振り上げた。

「よし!!!みなもの者、出陣じゃー!!!」

「おーー!!!」

こうして、順平（が、ゲーム買う）のため、回転すしのバイトをみんなで手伝うこととなった。
果たして、どうなるのか…？

CMタイム

『ペルソナ3ポータブル、サウンドトラック発売中』

「よし、じゃあ、みんなに寿司の握り方をレクチャーするぜ」

調理場には、マグロやか、たこ、かつおなどの様々なネタが並べられ、酢メシの入った桶が置かれてあった。順平はそこに立ち、制服に着替えたキタロー、ハム子、ゆかり、風花に…、ついさっき呼び出したアイギスを加えて、寿司の握り方を教え始めた。
順平は、桶から酢メシを一握りする。

「いいかー、まずはマグロを握るぜー」

と言って、順平は手馴れた動きで手に取った酢メシを握り、シャリを形作る。形が整ったシャリに、わさびを付け……ネタのマグロを手に取り、そして……。

完成。

「ほい、出来上がりー」

かんぴょう巻きが出来上がった。

「なんでだー！ー！！！」

キタローは叫んだ。

「てめえ、今、いい感じにマグロ握ってただろ！！」………
「をまたぐ間になにがあった！！？」」

「パアアアアーン！！！」

キタローは、召喚したタナトスで順平の襟首を握った。

「仕方ねえだろ！！俺が、かんぴょう巻き以外を握ると、」………

「……。』をまたぐ間に、全部、かんぴょう巻きになるんだよ！等価交換、錬金術なんだよ！！！」

「どんな等価交換だ、それ！！！」

順平は、タナトスとキタローに睨まれつつ泣き叫ぶ。

「ああ、だから……、あんた、かんぴょう巻きしか握れないわけね……」

ゆかりは苦笑いをした。

すると、ハム子はふーん！と胸を張って、調理場に立つ。

「ふふーん！でも、さっきの説明で大体、よくわかった！今度はあたしが行くわ！」

と、ハム子は桶から酢メシを握る。

「ふふつ、ハム子ちゃんとあたしは料理研究部だし、特にハム子ち

ちゃんは料理が上手だから、ちゃんとお寿司握れると思う」

風花は笑いながら言う。

キタローはそれを聞いて冷静になり、タナトスを納めた。

ハム子は手馴れた動きで手に取った酢メシを握り、シヤリを形作る。形が整ったシヤリに、わさびを付け……ネタのマグロを手に取り、そして……。

完成。

「はい、完成！」

スイートポテトが出来た。

「なんでだ……！！！」

ドゴオオオーン！！

キタローは壁に頭を突っ込んだ。

「なんで、……をまたぐ間に、寿司がスイーツ（笑）になるんよ！！なんで、酢メシがポテトに変わるんだよ！！しかも、うめえ！！！」

血を噴出すキタローはスイートポテトを食べながら、ハム子にツッコむ。

順平は、俺のときと違ってツッコミ優しい……と疑問に思った。

ハム子は腰を床に置き、頬を赤く染め、目を細めてから、下唇を軽く噛んで、足をたたみ……。

「女の子は、スイーツが好き……」

と、セクシーポーズで誤魔化した。

「カワイ子ぶるな！……可愛いんだよ！！」

キタローはツッコんだ。

だから、なんで、俺のときと違ってツッコミ優しいんだ…と順平は疑問に思う。

すると、今度は風花が前に出た。

「じゃっ、じゃあ、次はあたし……」

と、風花は桶から酢メシを握る。

すると、キタローが青い顔をした。

「おっ、おい、風花で大丈夫なのか……」

キタローにコミュ活動ランク1での辛い記憶が甦る。

「ふふ、大丈夫よ！風花は、おにぎりは美味しく作れるんだから！だから、お寿司も握れるはずよ！」

風花と同じ、料理研究部のハム子は自信満々に言う。

キタローはそれを聞いて冷静になった。

風花は手馴れた動きで手に取った酢メシを握り、シャリを形作る。そのシャリに妙な草を乗せ、わさびと、なんか変な薬品を付け……ネタのマグロを手に取り、そして……。

完成。

「はい、出来たー」

途中過程がおかしい、見た目は普通のマグロが出来た。
みんな、固まった。

途中過程がおかしい、見た目は普通のマグロが完成して風花は喜んで。
んだ。

「やったー！うまく出来たー。食べてみる？」

風花は勧めたが、キタロー、ハム子、順平、アイギスは首を必死に横に振った。

だが…。

「まつ、まあ、見た目は普通よねー」

と言って、風花の料理の威力を知らないゆかりが、彼女の握った寿司を食べようとした。

「うわっ。やめれ！！」

キタローはゆかりを止めた。
だが、遅かった。

すでに、風花が握った寿司は、ゆかりの口の中に…。

「あーっ、なんだー、これー…」

ゆかりは風花の寿司を、何事もなく普通にモグモグ…と食べた。
が…。

「想像絶するほど、凶器…！！」

ゆかりは倒れた。マツスルドツキングのように、風花の寿司は後から地獄を見る性質のようだ。

「お、おい!!!」

「ゆかりいいいい!!!!!!」

「えっ、ゆかりちゃん!!!!」

キタロー、ハム子、風花は気絶したゆかりに駆け寄る。

ゆかりは口をパクパクさせ…。

「妙な草の刺激、香ばしさ…そこに、妙な液体のスパイスがミックスし、甘みと苦味の政権交代や…」

「ゆかりちゃん!!!!」

ゆかりは意識を失った。風花は泣きながら、ゆかりの体を揺する。

順平は頭を抱えた。

「うがあああ!!!!誰もまともに寿司握れない上に、とつとつ犠牲者が出ちまったよ!!!!」

ヒステリーを起こす順平の元に、アイギスが近寄った。

「順平さん」

「なんだよ、アイちゃん…」

「次は、私の番であります」

と言って、アイギスは調理場に立った。そして、酢メシを握る。

順平は諦め口調で…。

「いや、もう、いいよ……。ゆかりっちみたく、これ以上、犠牲者
出したくな…」

「出来ました」

「えっ!!」

!?

なんと、順平が喋っている間に、アイギスはマグロを完成させた。
しかも、かなり綺麗にシャリが握られ、ネタが光輝いている。そ
れを見て、キタロー、ハム子、順平は圧巻。驚いている。

そして、順平はアイギスの寿司を食べてみた。

「うっ、うめえ!!パラリ」と、シャリが口の中でほどけていく!
!これは、ほどよくシャリに空気が含まれたことよって起きるケ
ミストリー!!好きといえは簡単なのに、白といわれたら黒とい
たくなる天邪鬼!甘いだけの恋なら、ソルトをかけましょうの精神
が生きるセイ・MK-?!いつか君にあたらしく好きと、この気
持ちをちゃんと伝えようという、オレンジ色になりたい果実共が織
り成す、甘酸っぱい青春劇をシャリによって表現された!とって
も大げさではない!!まさに、寿司の萌えアニメ産業やああああ
~~~~~!!!!!!」

順平は叫んだ。

アイギスはもう二丁、マグロを握ったので、キタロー、ハム子も  
食べてみた。

「美味しい!」

「確かに、美味しい!」

二人も絶賛した。

「しかし、どうやって、こんな上手に握った…？」

と、キタローがアイギスに聞くと…。

アイギスは、調理場の隅にあったシャリの自動握り機に指をさした。

完ッッ!!

ブルーになりたい果実共が織り成す鎮魂歌（後書き）

元ネタ「銀魂 マダオ寿司」

幾月博士！今回の話をお許し下さい！！（前書き）

長らく期間を空けてしまって、申し訳ございません…。今回の話の内容に頭を抱え、軽いスランプに落ちました。というわけで、今回の話をお許し下さい。

幾月博士！今回の話をお許し下さい！！

「前回までの話を検索してみたよ、翔太郎。

「どうやら、キーワードにある『テレット』…、いや、『伊織順平』はゲームを買うために、回転すし『カカロット寿司』でバイトを始めたが、店長と店員の間で軋みが生じ、全員がストライキ。彼一人だけになったらしい。通りで、かんぴょう巻きしか出せないわけだ。そんな彼に救いの手を差し伸べたハム子、ゆかり、風花、キタロー、アイギスのメンバー達。誤解から、順平の手伝いをする事に果たして、どうなるのか…？」

「うーん…実に興味深い…！」

以上、仮面ライダーWのフィリップの真似しながら、前回の話を語る白鐘直斗君でした。

……………

全自動シャリ握り機のおかげで、かんぴょう巻き以外のメニューが出せるようになったキタロー達、そして、サエさんのキャラでは一番カツオに似てる順平。そのおかげか、客がだんだんと入るようになり、回転寿司『カカロット寿司』の前には、行列が出来ていた。

店内は、客で大にぎわいだ。

「はい！二名様入りましたー！」

「次、お待ちのお客様ー！」

「えっと、お会計は……………」

ハム子、ゆかりは接客、風花は会計でホールを回し、キタロー、

アイギス、カツオ………じゃなかった順平の3人は調理場で寿司などのメニュー類を作っている。

「ぼうやー、走っちゃダメよー！あつ、トイレはあつちですよー」

ハム子はバイトしてるおかげか、客捌きはなかなかだ。

「すごいな……、あいつ……」

その様子を、キタローは調理場から見て感心していると……。

「おい……、キタロー……」

「ぬっ？」

死んだような顔をした順平が現れた……。

「やべえよ……、ポンポン作りすぎて、ネタがねえよ……」  
「なっ！？」

順平にそう言われ、キタローは冷蔵庫を開けた。  
空っぽだった。

「なにがネタ切れだよ！仕入れしろオラア！！」

キタローはタナトスを召喚して、順平の襟首を握った。

「材料の仕入れの仕方は教えてもらわなかったんだよ！！」

順平は泣き叫ぶ。

キタローは、くっ！と苦い顔をして店内に目を向けた。

「仕方ない……、今日は、もう閉店だ……」

と、キタローは諦めたが……。

「待ってくれ！」

タナトスに睨まれながら、順平はキタローの肩に手を置いた。

「仕方ないだろ、もう閉店するしかない……」

「さつき電話があつて、これから、先輩らが来んだよ！」

「!?!」

順平は、予約名簿をキタローに渡した。予約名簿には、『桐条、真田、荒垣、天田』の名前が書かれている!?

キタローは、タナトスからメサイアにペルソナを変えて、順平の襟首を握った。

「なにが予約だよ!断れよオラア！」

「だって、先輩方だもん!断れねえーよ!!!」

順平は泣き叫んだ。

「ハム子、閉店だ！」

キタローは店内に居るハム子に閉店を告げた。

.....

CMタイム

『P3Pサウンドトラック、発売中』

.....

美鶴、真田、天田、荒垣が来るまで、店を閉店にしたキタロー達  
.....

ガラーン...となった店内。チェーンコンベアの上にはなにもなく、  
皿はすべて回収された。

キタローは調理場に全員を集め、残った皿、ネタを確認した.....  
が、微々たる物だった。肝心のマグロ、カツオ、いか、蟹などが品  
切れしており、サイドメニュー系が残っていた。

順平は頭を抱えた。

「うがあああああー！！これじゃあ、まるで、ダメな、お寿  
司屋さん！略して、マダオじゃねえか！！」

順平は床に頭を抱えて伏せた。

「落ち着いて下さい、マダオ」

塞ぎ込む順平の肩を、アイギスは優しく叩いた。

キタローは時計を見つめた。

美鶴達が来るまで、あと30分.....。

どう考えても、仕入れには間に合わない.....。

さらに、美鶴達が来てから、ネタがありませんなんて言ったら、  
二年生陣は美鶴に処刑される.....。

「今のうちに、実家に電話しておこうかな.....。今まで、育ててく  
れて、ありがとう.....って」

実家に電話を掛けはじめた風花は青い顔をして、処刑を覚悟した。

「諦めんなよ！風花！」

順平は立ち上がったって、風花に言うが……………。

「誰のせいだと、思ってるのよ！このマダオ！！」

ゆかりは血管を浮き上がらせて、キレた。

どうにも良くない状況だ……………。

すると、ハム子は握り拳で立ち上がった。

「みんな、落ち着いて！前向きになろうよ！！」

ハム子が叫ぶ。

この言葉で、みんなはハッ！とした。

「残った材料で、上手いことやるしかないよ！！逃げちゃ駄目だよ！！」

このハム子の言葉で、場の空気が変わった。

「そつ、そつだな！材料は完全になくなったわけじゃねえし」

「そうであります。まだ戦えるであります」

「そうね、逃げちゃ駄目だよね……………」

「うん、やれるだけやりましょう！」

順平、アイギス、ゆかり、風花は立ち直り、冷静さを取り戻した。  
みんなの絆が深まった……………。

そして…………。  
ガラガラガラ…………。  
！？

店の戸が開く。ついに、美鶴達が現れた。

「来たぞ！」

キタローは戦闘態勢を整えた。

「みんな、頑張ろう！」

ハム子の言葉に、みんなが頷いた。

ついに、美鶴達VS二年生陣の戦いの火蓋が切られた。

ゴゴゴゴ…………。

……………

CMタイム

『P4ドラマCD Vol.2、12月23日発売。今年のクリスマスは、これで決まりだ』

……………

「いらつしやいませー……」

少々苦味のある笑顔で、ハム子、ゆかり、風花はカウンター席に座った美鶴、真田、荒垣、天田に挨拶した。この三人が接客を受け持つらしい。

いつもの課外活動メンバーしか居なく、貸切状態になった店内に妙な緊張感が走る。皿が回っていないチェーンコンベアは虚しく回

る。

「おー。お前達、本当にここでバイトしていたんだな」

「ハム子さん…、制服なかなか似合ってますよ……」

真田は笑い、天田は制服姿のハム子にちょっと照れた様子を見せ  
ている。

「君達が、ここでアルバイトをしているということでは来させてもら  
ったよ……。シャドウとの戦闘、学業も大切だが、このようにアル  
バイトをして社会に貢献することも……」

美鶴は微笑みながら、いつものように演説じみた話を始める。

その頃……

調理場では、キタロー、順平が遠くから美鶴たちを見つめていた。

「会長得意の長話が始まったぞ……」

「いいぞー、いいぞー、今、アイちゃんが買い出しに言ってる間、  
なんとか時間を稼いでてくれ……」

と、キタロー、順平は買い出しに行ったアイギスが戻ってくるま  
で時間が潰れるの祈る。

が……。

真田はおしぼりで手を拭きながら……。

「ははは。美鶴、あんまり話が長いと興ざめしちまうぞ」

！？

美鶴の話に水を刺した。

「おっと、すまない。そうだな」

美鶴の話は止まった。そして、彼女もおしぼりで手を拭き始める。キタロー、順平はしまった！と叫ぶ。

すると、荒垣は目の前のなにも流れてこないチェーンコンベアを見て…。

「っーか、さっきから、なんも流れてこねえんだけどよ…」

と言った。

とつとつ、ツッコまれてしまった。

すると…。

「あつ、ここはオーダー制で…、お客さんが注文してからお寿司を流すようにしてますー…」

ハム子は、少々苦しい言い訳をして品切れで流れてこないのを誤魔化す。

そうなのか…と、美鶴、真田、荒垣は頷いた。

すると、天田が…。

「じゃあ、お先に注文させてもらいますけど…」ツナコーン『下  
れい』

と、無邪気な笑顔で『ツナコーン』を注文した。

「はい、ツナコーン一丁！」

苦い顔で、ゆかりは調理場のキタローに注文を告げる。

調理場では、キタロー、順平が必死でツナコーンがあるか確認す

る……が、なかった。あるのは、缶詰のスイートコーンだけで、肝心のツナ缶がない。

「やべえええ、ツナがねえよ!! 出せねえよ!!」

順平は叫ぶ。

だが、キタローは……。

「くっ、仕方ない!」

と言つて、とある物を取り出す。

数分後……。

遅いなー……と、天田が言っていると……。

グリーン……と、なにかが流れてきた。

「あっ、来た来た!」

天田の目の前に、皿が流れてきた。

……。

……。

……。

皿には、綱つなとスイートコーンの缶詰が。

……。

……。

……。

天田は固まった。

綱とコーンが乗った皿は取られることなく、そのまま流れて行った。

……。

……。

.....  
ツナコーンではなく、あまりにも寒すぎるギャグが流れてきたことに対し、真田、荒垣は硬直。

美鶴の顔の影が濃くなった。

ハム子は猛ダツシユで、調理場にツッコんだ。

「うおおおー！いいい！なに、やっとんじゃあー！」

と言って、キタローの襟首を掴む。

「これしか、これしか、なかったんだよ……」

キタローは泣きながら、唇を噛み締める。

順平は、ひたすら横で止まることのない涙を流す。  
すると……。

「あっはははは！さっきのジョークー！！ジョークー！！」

「そうそう！！この店はジョークでお客さんの緊張を解するのが売りなんですー！！」

ゆかり、風花は苦し紛れの精一杯の誤魔化しをした。

そんな二人の姿に、キタロー、ハム子はかけがえない絆を感じた。

「あつ、そ、そうなのか、ははは……」

「さ、寒すぎて、ちょっと笑えなかったが、はは、そういうことが、はははー……」

真田、荒垣も無理に合わせてくれた。

そんな二人の姿に、キタロー、ハム子はかけがえない絆を感じた。

「僕のツナコーン……」  
「……」

だが、天田、美鶴の空気は重い。  
そんな二人の姿に、キタロー、ハム子は絆の崩壊を感じた。  
真田は気を取り直して、メニュー表を見た。

「じゃ、じゃあ、俺は『マグロ』をもらおうかなー」

真田は爽やかな笑顔で『マグロ』を注文した。

「はい、マグロ一丁！」

苦い顔で、ゆかりは調理場のキタローに注文を告げる。  
調理場では、キタロー、順平、ハム子が必死でマグロがあるか確認する……が、なかった。

「やべえええ、マグロがねえよ！！出せねえよ！！」

順平は叫ぶ。

だが、キタローは……。

「くっ、仕方ない！」

と言って、とある物を取り出す。  
数分後……。

遅いなー……と、真田が言っていると……。  
グーン……と、なにかが流れてきた。

「おっ、来たか……」

真田の目の前に、皿が流れてきた。

皿の上には、漫画本が……

「なんだ、これは？」

真田は皿の上に置かれた漫画本を手を取った。

漫画本は週刊少年ジャンプに連載されていた名作バトル漫画、

『幽遊白書』だ……。

真田はパラリ……とページをめくる。

内容は、戸愚呂兄弟が出てきたあたりだ……。

マグロじゃなく、戸愚呂兄弟が流れてきた……。

……。。

真田はコミックスをテーブルに置いて、頭を抱えた。

マグロではなく、あまりにも寒すぎるギャグが流れてきた。

さらに、天田と美鶴の顔の影が濃くなった。

ゆかりは猛ダッシュで、調理場にツッコんだ。

「バカか、お前ら！！ていうか、バカだ、お前ら！！」

と言つて、キタローの襟首を掴む。

「これしか、これしか、なかつたんだよ……」

キタローは泣きながら、唇を噛み締める。

順平は、ひたすら横で止まることのない涙を流しては抑え、ハム子も涙を抑える。

すると……。

「あつはははは！！これも、ジョークー！！ジョークー！！レツツ・イン・ザ・ジョークー！！こうやって、しつこいくらいにジョークでお客さんの緊張を解すのが売りなんですー！！」

風花は壊れ気味で、苦し紛れの精一杯の誤魔化しをした。

そんな風花の姿に、キタロー、ハム子はかけがえない絆を感じた。

「そ、そうなのか、はははー……」

「さ、寒すぎて、森羅万象に笑えなかつたぜ、はは……」

気を取り直した真田、荒垣はまた無理に合わせてくれた。

そんな二人の姿に、キタロー、ハム子はかけがえない絆を感じた。

「僕のツナコーン……」

「……」

だが、天田、美鶴の空気は重い。

そんな二人の姿に、キタロー、ハム子は絆の崩壊を感じた。

真田は気を取り直して、またメニュー表を見た。

「じゃ、じゃあ、俺は『蟹』をもらおうかなー」

真田は苦い笑顔で『蟹』を注文した。

「はい、蟹一丁!」

苦い顔で、風花は調理場のキタローに注文を告げる。

調理場では、キタロー、順平、ハム子、ゆかりは必死で蟹があるか確認する……が、なかった。

「やべえええ、蟹がねえよ!!!出せねえよ!!!」

順平は叫ぶ。

だが、キタローは……。

「くっ、仕方ない!」

と言って、とある物を取り出す。

数分後……。

遅いなー……と、真田が言っていると……。

ガラガラガラー!ー!ー!と、急に戸が乱暴に開いた。

「なんだ!ー!」

真田、荒垣はびっくりして、戸の方に振り向くと……。

……。  
振り向いた先には……。

〈謝罪〉

このあと、蟹がないので、みんなが『カーニバル』をするという展開になりますが、それがあまりにも寒すぎて公開出来ないのと、上記の無理やりすぎるダジャレを書いているだけでも作者が後悔しているため、今回のお話は以上で終了させて頂きますよう、ご了承下さい。

なお、近所にか 寿司が出来たら、週2のペースで行ってしまうという自分の未熟さをお許し下さい。

うん、大人の女性はカツパ巻き！

幾月博士！今回の話をお許し下さい！！（後書き）

謝罪文の元ネタ『ピューと吹くジャガー』

## クリスマス番長（前書き）

今回の本編は通常とは違ったブックゲーム形式になっており、少々、ニュアンスが難しく、いつも以上に読みにくくなっています。なお、本日はクリスマスであります。クリスマスイベントは原作ゲームの方をお楽しみ下さい。

## クリスマス番長

『ドキドキアドベンチャー！キタローと仲良くなるうゲーム！』

あなたは今、ペルソナ3男性主人公こと、キタロー君の住む学生寮の玄関に居ます。

サイコロでああなたの運命を選び、見事、キタロー君と仲良くなってください。

玄関をノックすると、ゆっくりとドアが開きました。

中から、現れてきたのは……？

……

『パート1』

・サイコロを振って、サイコロの目で1〜4の数字を出し、下の表の通りに進みましょう。

・サイコロの目で1が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で2が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で3が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で4が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で5、6が出たら…？の行に進んでください。

？ドアを開けると、キタロー君が出てきました。

「あなた、デスが憑いてそうだから帰って下さい」

と一言残して、ドアを閉めました。

ゲームオーバー！

？ドアを開けると、キタロー君が出てきました。

「あなたハイレグアーマー、似合わなさそうだから帰って下さい」

と一言残して、ドアを閉めました。

ゲームオーバー！

？ドアを開けると、真田先輩が出てきました。

「なに、あいつの友達か？そうか、夕方までならいいぞ」

と言って、真田先輩はあなたを寮に入れてくれました。

クリア！（数行後のパート2へ進んでください）

？ドアを開けると、アイギスさんが出てきました。

「あなたは、ダメです」

と一言残して、ドアを閉めました。

ゲームオーバー！

？ドアを開けると、エリザベスさんが出てきました。

メギドラオン（ダメーシ9999）を二発発射されました。

ゲームオーバー！！

『パート2』

あなたは見事、真田先輩から寮内へ向かい入れられました。中に入ると、そこで待っていたのは…。

・サイコロを振って、サイコロの目で1〜4の数字を出し、下の表の通りに進みましょう。

・サイコロの目で1が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で2が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で3が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で4が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で5、6出たら…？の行に進んでください。

230

？ラウンジには、キタロー君がソファアに座ってました。

「いや〜あなたはハイレグアーマーが似合いそうだな。でも、メイド服は似合わなさそうだ」

と言って、キタロー君はトイレに向かいました。  
ゲームオーバー！！

？ラウンジには、キタロー君がソファアに座ってました。

「2階に順平って奴が居るから、そいつと遊んで」

と言って、キタロー君はトイレに向かいました。  
ゲームオーバー……！

？真田先輩がラウンジのソファに座らせてくれました。

「今、あいつはトイレだ。あいつが来るまで、お茶でも飲んでくれ」

と言って、真田先輩はお茶を進めてくれました。  
クリア！（数行後のパート3へ進んでください）

？ラウンジには、アイギスさんが居ます。

「あなたは、ダメです……」

ゲームオーバー……！

？メギドラオン。

ゲームオーバー……！

……

『パート3』

あなたはラッキーです。キタロー君はトイレから出てきた後、体調が絶好調になり、機嫌が良くなるのです。

そして、キタロー君はトイレから出てくると…。

・サイコロを振って、サイコロの目で1〜4の数字を出し、下の表の通りに進みましょう。

・サイコロの目で1が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で2が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で3が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で4が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で5、6が出たら…はいはい、メギドラオン。ゲーム

オーバー。

？キタロー君はトイレから出てくると…。

「よし、トイレから出て最初に見た奴に、ゴッドハンド喰らわせるぞー！」

と言って、召喚器を頭に構えました。

ゲームオーバー！！

？キタロー君はトイレから出てくると…。

「最初のオルフェウスがぶち割れて、タナトス出てきて、シャドウをグチャグチャにして潰した時の気持ち悪さを思い出した」

と言って、召喚器を頭に構えました。

ゲームオーバー！！

?キタロー君は、満面の笑みでトイレから出てくると…。

「キミ、ヨモツシコメに似てるね」

ゲームクリアー！

おめでとうー！！

コングラチレーションー！！

?トイレから出てきたのは、アイギスさんでした。

「あなたは、ダメです…」

ゲームオーバーー！！

.....

『P4ドラマCD Vol.2、絶賛発売中。今年の大晦日は、これで  
決まりだ』

.....

『ドキドキアドベンチャー！番長と仲良くなるうゲーム！』

あなたは今、ペルソナ4主人公こと、番長の住む堂島家の玄関に  
居ます。

サイコロであなたの運命を選び、見事、番長と仲良くなってくだ  
さい。

玄関をノックすると、ゆっくりとドアが開きました。

中から、現れてきたのは……？

……

『パート1』

・サイコロを振って、サイコロの目で1〜4の数字を出し、下の表の通りに進みましょう。

- ・サイコロの目で1が出たら……？の行に進んでください。
- ・サイコロの目で2が出たら……？の行に進んでください。
- ・サイコロの目で3が出たら……？の行に進んでください。
- ・サイコロの目で4が出たら……？の行に進んでください。
- ・サイコロの目で5、6が出たら……？の行に進んでください。

？ドアを開けると、番長が出てきました。

「今から、菜々子と餃子パーティーだから……」

と一言残して、ドアを閉めました。

ゲームオーバー！

？ドアを開けると、番長が出てきました。

「今から、菜々子とジュネスに行くから……」

と一言残して、ドアを閉めました。

ゲームオーバー！

?ドアを開けると、番長が出てきました。

「菜々子…」

番長はホッコリしながら、ドアを閉めました。  
ゲームオーバー!!

?ドアを開けると、奈々子ちゃんが出てきました。

「えっ、お兄ちゃんのお友達。うん、どうぞー」

と言って、自宅に入れてくれました。

クリア！（数行後のパート2に進んでください）

?ドアを開けると、マーガレットさんが出てきました。

メギドラオン（ダメージ9999）を発射されました。  
ゲームオーバー!!

.....

『パート2』

あなたは見事、奈々子ちゃんから堂島宅へ向かい入れられました。  
中に入ると、そこで待っていたのは…。

・サイコロを振って、サイコロの目で1〜4の数字を出し、下の表

の通りに進みましょう。

・サイコロの目で1が出たら…？の行に進んでください。  
・サイコロの目で2が出たら…？の行に進んでください。  
・サイコロの目で3が出たら…？の行に進んでください。  
・サイコロの目で4が出たら…？の行に進んでください。  
・サイコロの目で5、6出たら…？の行に進んでください。

？茶の間には、番長が座ってました。

「お前は菜々子のなんだ？」

と言って、番長は怒りました。

ゲームオーバー！！

？茶の間には、番長が座ってました。

「テレビの中に、イザナミって奴が居るから。そいつと遊んでおい  
て」

と言って、番長は奈々子ちゃんの頭を撫でました。

ゲームオーバー！！

？茶の間には、番長が座ってました。

「菜々子…」

番長はホッコリしながら、ドアを閉めました。

ゲームオーバー！！

？奈々子ちゃんは茶の間まで案内してくれました。

「今、お兄ちゃん…。お風呂だから」

と言って、奈々子ちゃんはお茶を用意してくれました。  
クリア！！（数行後のパート3に進んで下さい）

？メギドラオン。

ゲームオーバー！！

.....

『パート3』

あなたはラッキーです。番長はお風呂から出てきた後、意味もなく機嫌が良くなるのです。

そして、番長はお風呂から出てくると…。

・サイコロを振って、サイコロの目で1〜4の数字を出し、下の表の通りに進みましょう。

・サイコロの目で1が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で2が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で3が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で4が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で5、6が出たら…はいはい、メギドラオン。ゲーム

オーバー。

?番長はお風呂から、腰に手ぬぐい姿で出てくるよ…。

「よし、菜々子ー！好きだー！」

と言いました。

ゲームオーバー…！

?番長はお風呂から、腰に手ぬぐい姿で出てくるよ…。

「菜々子オオオー…！」

と叫びました。

ゲームオーバー…！

?番長はお風呂から、腰に手ぬぐい姿で出てくるよ…。

「菜々子…、愛してる…！」

と言いました。

ゲームオーバー…！

?番長はお風呂から、満面の笑みで腰に手ぬぐい姿で出てくるよ…。

「菜々子は俺の嫁…！」

ゲームクリア!!

おめでとう!!

コングラチレーション!!

.....

『P4ドラマCD Vol.2、絶賛発売中。案外、公式の番長もシスコンだったよ』

.....

クリスマス番長（後書き）

元ネタ『ピューー！と吹くジャガー ドキドキアドベンチャー』

## とある番長の超妹愛

2011年某月某日（木） 晴れ

夜

今日は、堂島が仕事で帰りが遅くなるそうだなので、今日の夕食は菜々子と二人で済ませることにした。こたつの上に今日の夕飯の惣菜を置いて、一緒に手を合わせた。

「せーの、いったただきますー」

と、箸を握った瞬間…。

ジリリリリン！！

いきなり、電話が鳴った。

「誰だろ…」

菜々子は立ち上がって、電話を取る。

自分は箸を置いて、菜々子がこたつに戻るのを待つことにした。

「もしもし…、あっ！うん！」

電話に出た菜々子は、嬉しいそうな表情をしている。

……………。  
誰からの電話だろうか…。

「うん！うん！そーなのー、へえー」

やけに楽しそうな表情をしている。

数分ぐらいすると…。

「じゃあねー、バイバイ！」

菜々子の電話が終わったようだ。

そして、菜々子はこたつに戻った。

……。

「あつ、お兄ちゃん、ごめん！お話し長くなっちゃった……」

菜々子は箸を握りながら、自分に謝った。

いや、気にしてないさ！と、100万ボルトの笑顔で親指を立てた。寛容力が高まった。

そして、再び箸を握りなおして、いただきますをした。

……。

夕食を食べ始めたはいいが、どうも、さっきの菜々子の電話が気になって仕方ない……。それに、菜々子の様子がいつもと違っていたような……。

……。

いかん、どうも気になって、なにを食べても味がしない……。

そんな自分の様子に気づいたのか……。

「お兄ちゃん、具合悪いの？」

！？

どうやら、菜々子に心配されてしまったようだ……。

……。

意を決して、さっきの電話について聞いてみることにした。  
すると、菜々子は……。

「あつ、学校でね、好きな人が出来たの」

と言った。

なんだ、そんなことかー。と笑った。よっに見せかけて、うわあああああ！！！自分は叫びながら、こたつに頭を突っ込んだ。

「お兄ちゃん！！」

菜々子はガビーン！となり、ビツクリした。

こたつに潜りながら、菜々子に好きな人が出来ただと…、ついにそんな日が来てしまったのか…と自分は爪を噛んだ。爪から血が出た。

「お兄ちゃん！出てきてー！！」

菜々子が両足を引っ張るが、自分はこたつの脚を両手で掴んで離れなかった。

くそう！！相手はどんな男だ！！菜々子を傷つけたら、許さないぞ！！と叫びながら、イザナギのカードを握っていると…。

「友達に好きな人が出たの！」

と、菜々子は叫んだ。

エッ…。

自分はこたつから出た。

「友達に好きな男の子が出て、そのことでお話してたの…！」

菜々子は顔を真っ赤にして言った。

それを聞き、ははは…、そっ、そういうことは早く言いなさい…！と言って、自分は髪の毛と学ランの襟を直して冷静さを繕った。

「もうー…」

菜々子は頬を膨らませて怒る。

ははは、ごめん、ごめん。と笑いながら菜々子に謝った。

「もうー、お兄ちゃんのおっちょこちよいー!」

と言って、菜々子は笑った。

こうして、夜遅くなるまで、二人で笑いあって過ごした。

翌日 晴れ

朝礼の時間

自分はステージの上に、アコースティックギターを持って立った。昨日のそんな些細な出来事で生まれたのが、この曲です…。聴いてください、『菜々子isフォーエバー』…。と曲のタイトルを言っつて、自分はギターを演奏し始めた。

朝礼の校長の挨拶を割いて、全校生徒の前で自分はギターを弾いた。

陽介、千枝、雪子、完二、りせ、直斗はゲッソリしている…。

……

CMタイム

『P4ドラマCD vol.2発売中!番長の修羅場が見れるぜ!』

……

おまけ

『ドキドキアドベンチャー！ハム子ちゃんと仲良くなるうゲーム！』

あなたは今、ペルソナ3女性主人公こと、ハム子ちゃんの住む学生寮の玄関に居ます。

サイコロであなたの運命を選び、見事、ハム子ちゃんと仲良く করতেください。

玄関をノックすると、ゆっくりとドアが開きました。

中から、現れてきたのは……？

……

『パート1』

・サイコロを振って、サイコロの目で1〜4の数字を出し、下の表の通りに進みましょう。

・サイコロの目で1が出たら……？の行に進んでください。

・サイコロの目で2が出たら……？の行に進んでください。

・サイコロの目で3が出たら……？の行に進んでください。

・サイコロの目で4が出たら……？の行に進んでください。

・サイコロの目で5、6が出たら……？の行に進んでください。

？ドアを開けると、真田さんが出てきました。

「お前は、あいつのなんだ……？」

と鬼気迫る表情で一言残し、ドアを閉めました。

ゲームオーバー！

?ドアを開けると、荒垣さんが出てきました。

「てめえはあいつのなんだ…?」

と鬼気迫る表情で一言残し、ドアを閉めました。  
ゲームオーバー!

?ドアを開けると、ハム子ちゃんが出てきました。

「あつ、いらっしやい!」

と言って、ハム子ちゃんはあなたを寮に入れてくれました。  
クリア! (数行後のパート2へ進んでください)

?ドアを開けると、アイギスさんが出てきました。

「あなたは、ダメです」

と一言残して、ドアを閉めました。

ゲームオーバー!

?ドアを開けると、エリザベスさんが出てきました。

メギドラオン(ダメージ9999)を二発発射されました。  
ゲームオーバー!!!

.....

『パート2』

あなたは見事、ハム子ちゃんから寮内へ向かい入れられました。中に入ると、そこで待っていたのは…。

・サイコロを振って、サイコロの目で1〜4の数字を出し、下の表の通りに進みましょう。

・サイコロの目で1が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で2が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で3が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で4が出たら…？の行に進んでください。

・サイコロの目で5、6が出たら…はいはい、メギドラオン。ゲームオーバー！。

？ラウンジには、天田君がソファーに座ってました。

「ハム子さん…。その人は、あなたのなんなんですか…!？」

と叫んで、天田君は部屋に走って行きました。

ゲームオーバー!!

？ラウンジには、コロマルが居ました。

あなたは嘸まれました。

ゲームオーバー!!

？ハム子ちゃんがラウンジのソファーに座らせてくれました。

「ささっ、お茶でも飲んで」

と言つて、ハム子ちゃんはお茶を進めてくれました。

ゲームクリア！！

おめでとうー！！

コングラチレーション！！

? ラウンジには、アイギスさんが居ました。

かなり思いつめた表情をしています。

アイギスさんは重々しく口を開きました。

「ハム子さん…、あの日の『あの瞬間』はなんだったのですか…」

ゲームオーバー！！

## とある番長の超妹愛（後書き）

えー、2009年最後の更新となります。今年の5月からスタートした原作のイメージフルボッコな作品ではありませんが、多くのアクセス数と感想などをいただき、本当にアリガトウございました。

ジャッジメント（アルカナ的な意味で）ですの！（前書き）

遅くなってしまいました。明けましておめでとございます。

ジャツジメント（アルカナ的な意味で）ですよ！

2011年某月某日（日） 晴れ

昼間

ジュネス屋上フードコート。

今日は、特別捜査隊のみんなと集まって他愛のない話をした。

「なあ、完二。前から思ってたけど……なんで、お前、武器が盾なのに……ガードのとき、両腕固めてガード（戦闘での完二のガード参照）だよ。盾使ってガードしろよ」

「いや、だって、男は黙って素手ガードっしょ！」

「アホか」

「なんツスかー、それー！ひでー、花村先輩、ひでー！俺、族潰した時も素手ガードだったんすよー！」

はははは……！と陽介と完二のやり取りを、みんなが笑った。  
すると……、千枝が……。

「つか、今更だけど、完二君、なんだかんだ言って族潰してるんだよねー」

と言った。

すると、陽介が頷く。

「こいつ、ニワトリみてーな頭だけど、なんだかんだで武勇伝いっぱいだしなー」

「誰がニワトリだ……コラ……」

陽介が笑いながら、隣に座る完二の頭を小突く。

「うーん…、考えてみると、このメンバーって忘れがちだけど、凄いのばっかだよなー」

そう言って、千枝はみんなを見つめた。

「雪子は旅館の女子高生女将だしー、りせちゃんはアイドルで、直斗君は少年探偵。で、完二君は手芸が得意でー、武勇伝多数。んで、クマ君は中身に人間が生えたりして……………とにかく、謎だらけ……………」

「あつ、確かに、すげーなー」

「ウホホーイ！クマ、褒められたクマー！！」

千枝と陽介が感心すると、雪子、りせ、直斗、完二、クマは照れた。

そして……………。

「まあ、そんなメンバーの中、一番際立ってるのが……………」

千枝は視線を違う方にソロリ…と向けた。

みんなの視線もソロリ…と違う方向に向けた。

……………。

みんなの視線の先には、ジュネス屋上でサイン会を行っている自分の姿が……………。大きく『番長のサイン会』との看板が掲げられている。

「きゃー、サインもらったー！！」

「うわー、番長のサインだー！！」

「ほほ…婆さんや、番長のサインだぞ……………」

サインを貰った老若男女は歓喜している。

自分は机に座りながら、長蛇の列に並ぶ一人一人に丁寧にサインをした。寛容力が高まった。

まさに番長!!!

なんで、あいつ、サイン会やってんだ…と陽介は思った。完二は頭を抱えた。

「あの人、本当に何者なんスかね……」

「センサーは、クマのセンサーだクマー」

クマはプクプク…と笑う。  
すると…。

「はぁー…」

急に、千枝はため息を吐いた。

「どうしたの？千枝」

そんな千枝に、雪子は気づいた。

「いやぁー…。こうして見ると、あたしと『花村』って普通だなー  
って…」

千枝はゲツソリしながら言った。

「おっ、おい、里中…なに、俺を道連れしてんだよ、コラ…」

陽介はさりげなく含まれたことに対して、千枝を責めた。

「ごめん…」

「……………」  
「……………」  
「こつちこそ、すまねえ……………」

普通に、千枝に謝られた陽介は謝り返した。

……………。  
肩書きが凄いメンバーが多いせいか、キャラクター設定が普通気味の陽介と千枝の空気が重くなった。

「俺ら、つて…フツーだな」

「うん…」

陽介と千枝は沈んだ。

「げっ、元気出してくださいよ！お二人さん！！」

「そーよ！そーよ！」

「そーですよ！！」

完二、りせ、直斗は凄い勢いでフォローを始めた。

「花村先輩はジュネスの息子で有名だし、気苦労の多いバイトリーダーとか頑張ってる偉いと思いますし、一年の女子の間でも（学園祭の女装コンテストに出たことで）話題の人ツスよー」

「そっ、そかな…」

完二のフォローに、陽介はピクリン…と立ち直ってきた。

「学校では、千枝先輩の隠れファン、結構多いよー」

「そうですねー。毎日、特訓を頑張ってる運動神経も凄いですし、メンバーで唯一、追撃で敵を瞬殺出来ますし」

「そつ、そかな…」

りせ、直斗のフォローに、千枝はパチクリン…と立ち直った。

「二人とも、十分凄いクマよー」

クマが押しの一言を付け加えた。

これにより、陽介、千枝は立ち直った。

「だよなー、ふはははー!!」

「そよねー、あはははー!!」

陽介と千枝は、肩を組んで笑いあった。

ふうーと汗を拭いながら、完二、りせ、直斗が息を吐く。

すると、雪子が…。

「でも実際、二人には私達とっても助けられてるよね」

と、しみじみと言った。

「そうッスよー」

「うん」

「ですね」

「そうクマー」

雪子の言葉に、完二、りせ、直斗、クマが頷いた。

「天城…」

「雪子…」

陽介、千枝の目が潤む。  
そして…。

「シッコミとが」

雪子の一言で、場が凍りついた。  
そして、急に雨が降り出した。

翌日(月)雨

授業中

柏木がうなぎについて語ってる中、陽介は昨日の雪子の言葉を思い返す…。

(俺って、ツッコミなのか？確かに、公式のドラマCD・vol12でも、俺が居ないから誰もツッコまないよ的なこと言ってたし……  
…いや、俺はポケる側だろ！そーだ！俺はポケだ！口を開けば、ガツカリ王子って言われるくらいに、俺は下ネタ言ってるし、俺はツッコミなんかじゃねえぞ！)

陽介は俺はツッコミではないと、心の中で葛藤している。  
すると…。

サイレント・サバイバー！！

と、自分は寝言を叫んだ。

……。

……。

……。

クラス中が、シーン…となった。

陽介は啞然としながら右手を見た。

！？

無意識にツツコミの構えを取っている！？

(今、ツツコもうとした…。俺、今、こいつにツツコもうとした…)

陽介は右手を抑えながら震える。

陽介は恐怖した……。無意識に、右手がツツコミをしようとしたことに。

すると、雪子が…。

「それって、83話 - 109話のアニメ北斗の拳の主題歌よね」

と、平然と言った。

すると、千枝の身体が…ガクン!!と揺れた。

……。

千枝も右手を抑えている。

つまり…。

彼女も無意識にツッコミをしようとしたのだ!!

(里中!!お前もか!!)

千枝は震える右手を涙目で抑えている。そんな彼女の姿に陽介は同情した。

陽介と千枝は、静まれ!静まれ、俺の右腕!!と心の中で叫ぶのだった。

放課後

キンコンカンコーン。今日の授業が終わった。

自分は背伸びしながら、さあーて、今日は『無酸素運動』で瞬発力を鍛えるかなーと言った。

それを聞いた雪子は…。

「どの部位を鍛えるの?」

と、言って近づいてきた。

自分は振り返って、陽介や千枝もどうだい?と言おうとしたが、

二人は沈んだ表情のまま教室を去っていた。

……。

陽介、千枝は重い足取りで廊下を歩く。

「俺らって、ツッコミなのか…」

「かもね…。あたしら気づいたら、いつもツツコミポジションに立ってるし…」

陽介、千枝は無意識にツツコミをしようとした己の右手を見た。

「俺、右手が勝手に動いた瞬間、寄生獣のミギー思い出したよ…」

「あたしは、もののけ姫思い出した…」

「俺はラピユタが好きかなあ…」

二人はジブリ作品を語つつ、玄関に到着。そして、二人は外履きに履き替え、校舎から出る。

すると、陽介は右手を握りつつ…。

「とりあえず、俺はもうツツコミなんかしねえ……………」

「そつ、そだね…。なんか、これ以上にツツコミ役に回ったら、自分が自分じゃなくなるみたいだし…」

陽介の言葉に、千枝は頷いた。  
すると…。

キヤー！キヤー！！と、黄色い声援が二人の耳に入った。

「なんか、騒がしいわね」

異様に騒がしい声援がする方に、二人は目を向けた。校門の方からだ。そこでは、多くの老若男女が行列を作っていた。まるで誰かのサイン会のように…。

陽介、千枝はビクツとした。

「まさか…」

「また……………」

二人の脳裏に、先日ジュネス屋上でサイン会を行っていた自分の姿が浮ぶ……………。

また…サイン会をやっているのか…！と、二人は思った。

すると、条件反射なのか、本能なのか、二人の右手は自然と震え出す…。

だが…！

「ざ、残念だったな…！相棒…！」

「ははは…！そーよ！うちら、ついさつきツツコミをやめると決めただんだかね！」

陽介、千枝はツツコミ衝動を跳ね除け叫ぶ。

公式でもツツコミキャラ扱いされた陽介…。ボケるが、すぐに雪子にボケ返されツツコミに回ってしまう千枝…。

今の二人の想いは一つだった。

『もうツツコミはしない…！！』

この二人の意志は強固だった。

そのせいか、さっきまで震えていた二人の右手は…。

「ハッ！」

「震えなくなった…！」

陽介、千枝は右手の異変に気付いた。

なんと、二人の右手は落ち着きを取り戻し、震えが止まっていたのだ。

勝ったのだ。

二人は。

ツツコミ衝動に。

「やった!!」

陽介と千枝は喜んだ。  
だが……!!

よく見たら、サイン会をやっているのは売二だった。

陽介と千枝は、鼻で大きく息を吸った。  
そして……。

「お前のサイン会かよおおおおおおおおおおお……！！」

大声でツツコミをした。

「はいはい、押さないでー」  
「順番を守ってください」

よく見たら、りせと直斗が行列の整理をやっていた。

完！！

二！！

ジャッジメント（アルカナ的な意味で）ですの！（後書き）

いつも応援いただきありがとうございます。勝手ながら、一つ報告させていただきます。新年が始まって早々であります。次回の更新で、今作品の連載を終了させていただきます。理由は私生活で更新ペースが開くことが多くなってしまったのと、今シリーズの作品内容が原作に対して失礼な表現が多かったと感じたためです。まことに自分勝手ではありますが、どうかご理解の程をお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3983i/>

---

ペルソナW ~ハムはあなたを裏切らない!~

2010年10月8日23時52分発行